
冬子と密輸団

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬子と密輸団

【ZPDF】

Z138FD

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

旅というものは、突然いろいろと思いがけない展開を見せるもの
だ。それが旅のおもしろさでもあるのだろうが、ロンドンに着いて
そうそう人を殺すことになると、私自身まったく予想もしていな
かった。

部屋へ呼ばれたときから嫌な予感がしていたのだが、行ってみるとその通りだつた。加奈はいつものように私をなじり始めたのだ。それが彼女の趣味だつたのだ。

なじる理由など何でもよかつた。このときは、劇場で私の態度が悪かつたと加奈は言つた。

私はちかつてそんな態度は取らなかつたといえるが、眞実など加奈にはどうでもよかつたのだ。私たちは一階席にいたのだが、一階にいた数人の見知らぬ若い男たちが私に向かつて手を振つたことを持ち出し、私が色目を使つたからだと加奈はせめ立てた。

もちろん言いがかりに過ぎない。そんな男たちのことなど、私は手を振られるまで気がつかなかつたのだ。

「いやつて加奈からなじられるのは、いつものことだつた。『おまえは青野家にはふさわしくない』だの『おまえは青野家の名を汚そうとしている』などと言われるのが常だつたのだ。

私がこの世に一人とおらぬよつた品行方正な娘だつたとしても、加奈は何かしら欠点を見つけ出してせめ立てたに違ひない。そして最後は「お情けで面倒を見てもらつていい身のくせに」と言い、私が泣き出すように仕向け、それからやつと解放するのだ。

だがあの夜は違つていた。私は、涙を流して加奈の許しをこいつをうなことはしなかつた。誰にだつて、我慢の限界といつものがある。

あの部屋には、金属製のキューピッド像が飾られていた。つかみやすい手ごろな大きさではあった。私はそれを両手でつかみ、振り上げ、加奈の頭の上に振り下ろしたのだ。中身のつまつた重いものだから、一撃で十分だった。加奈は声も上げなかつた。私の突然の行動に驚き、恐怖の表情を浮かべたままで倒れた。あの女は、天使の像に頭を割られて死んだのだ。

ドアが開く音が聞こえたので振り返ると、物音を聞きつけてやつてきたのだろう。佐藤と目が合つた。死体を見て驚いた顔をしていたが、やがて言った。

「お嬢様、ご心配なく。私により考えがござります」

翌々日、私は一人でロンドンの町に出た。『ハチの巣通り』は、小さな家がごみごみと立て込んだあたりにあった。馬車が止まつたので、私は降りて、御者ぎよしゃに金を払つた。御者は私をじろりと見つめ返したが、チップを多めに渡すと「ありがとうございます、お嬢さん」と言つた。

歩道に立つてまわりを眺めたが、急に心細くなつてきた。すぐにここを離れたい気持ちになつたが、もう馬車は遠くへ行つてしまい、角を曲がつて見えなくなるところだった。

薄汚れた小さな家々がくつつきあつて立つている。道幅はとても狭く、石畳いしだたみはゆるんで、あちこちでめくれかかつてい。下水口からは、嫌な匂いのする空気が立ち上つてくる。のぞき込むと、ドブネズミがさつと姿を隠すのが見えた。

路地の曲がり角には住人たちがいて、みんな私を見ていた。歓迎

していの田つきには見えなかつた。突然びしゃりと音がしたので振り返ると、すぐそばの窓を誰かが閉めたところだつた。

目的の家は目の前にあつて、振り返つて見上げて、私はさうに絶望的な気分になつた。この街の雰囲気にぴつたりとマッチした家だ。安っぽい一階建てで、もとは白かつたらしが、今は真っ黒に汚れている。ベンキのはげたドアがあり、そのわきに番地が書いてある。

私はため息をついた。やはりここに違ひない。そつとドアをノックしたが、何の反応もなかつた。一分待つても何も起きなかつた。留守だと思い、私はうれしくなつた。早くホテルへ帰ろう。ここへ来た目的ははたせないが、私の知つたことではないといふ氣になつていた。

突然、ドアが開いた。予告も何もなく、足音も聞こえなかつたので、私はひどく驚いた。ドアを半開きにして、やせた背の高い女が顔を出していた。丸くゆつた髪をしているが、半分以上は白髪で、あちこちほつれたりおくれ毛があつたりする。着ているものも、貴婦人のようとは言いがたい。エプロンには茶色い大きなしみがある。

私を見下ろし、女は口を開いた。ケンカをするときのメンドリのような声を出した。

「ああ？」

「あのう、探偵のロングさんに…」

私が言い終わる前に、女はまた口を開いた。

「あのう、くつぶしの部屋は屋根裏だよ。案内なんかしないからね。行きたきや勝手に上がつとくれ」

「えつ？」

「ほれ

女はドアを大きく開いて、入れと私に合図をした。

そのあと、私がどんな思いを味わったか想像がつくだろうか。玄関からはすぐに階段が伸びていたが、狭くてきつくて汚れていて、足の下でギーギーと鳴って、とてもじゃないが楽しくなどなかつた。だがこの階段も、屋根裏部屋に比べればはるかにましだったのだ。

私は階段を一つ上がつて、屋根裏部屋の入口の前に立つた。クモの巣が張つて、ホコリが積もつて真っ白になつた窓から、ぼんやりと光が差し込んでいる。ドアは開いたままだつた。だから何も考えずに一歩踏み込んだのだが、次の瞬間にはもう後悔していた。

これが名探偵の住む部屋であるものか。机もイスもベッドの上も物だらけだ。脱いだままの服。くしゃくしゃの新聞。吸ガラでいっぱいの灰皿。

それだけではない。名探偵というのは、シャーロック・ホームズのようにかつこいい人のことだ。髪の毛はくしゃくしゃ、シャツもしわだらけ、ズボンつりの片方がずり落ちたままでも気がつかないまぬけ面のことではない。私の足音に驚いて、けどばされた犬のような顔で振り返つたりはしない。

「おまえ誰だ?」ロンドンで一番の名探偵（ホテルの支配人はそう言つた）、ジョン・ロングが私を見ていた。

「事件の依頼人です」

「依頼人？ 何の事件だ？ ああ、オレに解決しりつて言つんだな。
おまえの名前は？」

「ダニといこます」

ロングは露骨に嫌そつな顔をした。「外国の名前は覚えにくくて
いけねえや。イギリスへ来るときには、メアリーとかジョーンとか
適当に改名しておいてほしけな」

「よけいなお世話ですよ」

「そうかい？ まあいいや、おまえの名前はフイッシュとかいった
な？」

「冬子です」

「それでフイッシュ、何の用だつて？」

私はため息をついた。

「ちょっと困つたことが起きて、ホテルの支配人に相談したら、ロ
ングさんを推薦すいせんしてくれたんです」

「そりゃびっくりだ。どこのホテルだ？」

「北風ホテルです」

「おまえは金持ちだな」ロングは大げさに驚いた顔をした。「あそ
この宿費はくそ高いからな」

私は、口の日何回目かのため息をついた。

「まあ座れや」ロングは、そばのイスを指さした。自分はベッドに腰かけた。

私はそのイスを眺めた。大きな皿が置いてあり、何日前のものか知らないが、ひからびたフライドチキンが乗つかつている。その皿をどけないと座れないが、私は手も触れなかつた。

「じゃあ立つてろ」ロングの声が聞こえたので、私はほつとした。だが続いて、ロングはまくし立てた。「どんな事件なんだ？　早く話せ」

「加奈が行方不明になつてしまつたんです」

「おまえがファイツシユで、今度はカナリアか？　次の登場人物はブルドッグってんだろ？」

「加奈は日本人で、姓は青野といいます。青野家というのは、有名な大金持ちの一族です。いろいろ見聞を広めるという目的で、この加奈がヨーロッパ旅行に出て、その途中でロンドンに立ち寄つたというわけです」

「金持ちは違うよなあ」

「佐藤というメイドも一人ついてきています」

「日本の醸造酒は、なんていうんだつた？　そんな名前じゃなかつたか」

「私は通訳です」

ロングは大げさに首を振った。「おまえのしゃべり方は、昨日オレのサイフをすつたガキとそっくりだ。あれはおまえだつたんじやないのか?」

「一昨日の夜までは加奈は元気でした。芝居を見にいって、ホテルに帰ってきたのは九時ごろでした。そのままお休みを言って別れました。私は自分の部屋へ寝にいき、加奈は佐藤と一緒に寝室へ行きました」

「その醸造酒と同じ名前のメイドは何と言つてるんだ? 酒くさい息の女か?」

「日本の醸造酒はサケです。佐藤に着替えを手伝わせ、加奈は一人で寝室へ入つていったそうです。佐藤は、夜中に物音を聞いたりはしなかつたそうです。朝になつても起きてこないので見にいつたら、加奈のベッドは空っぽでした。すぐにホテル中を捜したんですが、どこにもいな。ホテルの人たちも、加奈が出ていくところは見かけなかつたといふことでした」

「警察へは届けたのか?」

「すぐに届けました。ところが、失踪後四十八時間たたないと捜索願いは受理できないとかで」

「警察が出てきたつて、何の役にも立ちやせんがな。それでも結局は受理させたんだろう?」

「なぜわかります?」

「おまえの得意やつな顔にそう書いてあらあ」ロングはにんまり笑つた。「どうやって受理させた?」

「大使館から手を回してもらいました。青野とこうしたのが、一九四〇年に立ちました。警察はすぐに刑事をよこしてくれました」

「やっぱり金持ちは違つねえ」

私はうそをばらして、フライドチキンの皿を投げつけいやつとかと思つたが、その前にまたロングが口を開いた。

「来たのは何といつ刑事だ?」

「『ゴーレッド警部です。でも、あんまりあてにならぬには見えませんでした』

「はつはつは」ロングが笑いだした。「ゴーレッドか」

「知つてるんですか?」

「よく知つてるさ。打ち上げ花火みたいにまっすぐ突き進むしか能のない男さ。そのうち火が消えて、失速してひょろひょろ落ちてくる」ロングは笑い続けた。

「それからどうした?」笑つて暑くなつたのか、ロングはシャツのボタンを一つゆるめた。

「『ゴーレッド警部がどうも信用できない感じだったので、私立探偵を雇つことになつて、一九四〇年來ました』

「なるほど」ロングは少し考え込んだ。「カナリアは、ロンドンには知り合いがいるか?」

「いないと 思います」

階段を上がつてくる足音が、背後から聞こえてきた。すぐにその人物が姿を見せた。ゴーレド警部だ。

「やつぱりここにおられましたな。ホテルで聞いてきたんです」ゴーレドは、私の顔を見て言った。ロングのほうを向き、帽子に手を当てる、あいさつするしぐさをした。「こんなにちは、ロング大尉」

「やあゴーレドの旦那。行方不明の日本の姉ちゃんについて、何かわかつたんですねかい？」

「ゴーレドの表情が少し変わった。「大変お気の毒ですが、遺体が発見されたようです」

「え？」と私。ロングも口を開けたまま、目を大きく見開いている。ゴーレドが続けた。

「遺体が検視局へ運ばれてくるのは夕方じろの予定です。確認はそれからということになりますが、たぶん間違いないでしょう。年齢や人相、服装などが一致しますから」

「もう殺されちまつたのか？　どこで発見されたんで？」とロング。

「ゴーレドはちょっと笑った。「ロンドン南部のシルバーという家ですよ、ロング大尉。それがちょっとおもしろいんですがね」

「どうおもしろいんです？」ロングは一瞬不審そうな顔でしたが、すぐにニヤニヤ笑い始めた。きっと何か猥亵わいせつなことでも想像したの

だろう。

「その家は今、建物を改装工事中でしてね。部屋の飾り物として、ある店から等身大の石膏像セッキヤウを購入したんです。一メートル近くある大きなものなんですが、少女が水ガメをかついだポーズの像でして、大きな木箱に入れられて、今朝その家に届いたんです」

「その中に死体でも入ってたんですねかい？」

「ええ、家人が梱包ヒコボシをほどいたんですが、その驚きようつたらなかつたそうです」ゴーリーは、いかにもおかしそうに笑つた。

「梱包してあつた？」

「分厚いしつかりした木箱で、外から見ておかしなところはなかつたそうですよ」

「その死体は、本当にその日本人に間違いないんですかい？」

「正式の報告はまだですが、まず間違いないでしょうな

「やれやれ」ロングは頭をかかえた。

私は一瞬、加奈の死をいたんでくれているのかと思つたのだが、すぐにロングがつぶやくのが聞こえた。

「これで金は入らなくなつた」

私はあきれで、このひげ面男を眺めていたのだが、すぐに思いつき、口を開こうとした。

「あのウ…

「なんだ?」ロングが顔を上げて、じろりと私を見た。

「これって殺人事件なんですよね?」

「それは間違いないと思います」ゴールドが答えた。「遺体の頭部には鈍器でなぐられた大きなキズがあるそうですから」

「じゃあ、やつぱりロングさんにお願いしないと」

「それは、オレに捜査を依頼したいといつゝとかい?」ロングはぴょんと立ち上がった。「警察が捜査するはずだぜ?」

「いや、でも…」この先どう言つたものか、私は少し考えた。だが考え続ける必要はなかつた。こわれたダムのように、突然ロングは大きな声で話し始めたのだ。

「せひやらせてくれ。昨日サイフをすられちまつて、一文無しなんだ。貧民救済、立派な人助けだ。いやあ、すてきなお嬢さんだねえ。大きな瞳がパツチリとして、実にチャーミングじゃないか。ねえ、
ゴールドの旦那」

五分後には私とロングは家を出て、表の通りを歩いていた。ゴールドの姿が角を曲がつて見えなくなり、ロングと二人きりになつて、すぐに私は言つた。

「ゴールド警部は、なぜロングさんのことの大尉つて呼んだんですか?」

「なぜつておまえ、オレは本当に大尉だからさ」

「本当に？」

「オヤジが海軍にいてな、兄貴も海軍軍人だ。そのオヤジが、オレもむりやり海軍に押し込みやがった。すぐに退役してやつたが、それでも一応は正式な大尉殿さ」

「へえ」

「感心するようなことじやねえよ。一インチも泳げない海軍大尉だぞ」

ロングは太つていて、背が高く身体はがっしりしていた。屋根裏部屋で見たときにはしまらない感じだったが、こうやって上着を着て帽子をかぶると、少しはさつそうとして見えた。ヒゲ面が海賊船の船長を思わせなくもないが、こついブーツをはいて、どすんどすんと歩く。

「まずメシを食つて、それから仕事にかかるつや」歩きながらロングが言った。

少し歩いたところに小さな食堂があった。『ハチの巣通り』にふさわしい、しみつたれた店だ。天井は低く、窓も小さく薄暗い。テーブルは数えるほどしかない。ロングは私を連れてそこに入り、テーブルの前にどかりと座った。

ロングは本当によく食べた。私はコーヒーを飲んだだけだが、この大男は、三十センチもあるパン一本とスープ三杯、焼いたベーコンを山盛り平らげた。最後に大きな音を立ててゲップをした。

「そんなに食べて、大丈夫なんですか？」テーブルの前から立ち上がりながら、私は言った。

「大丈夫さ。オレの胃は人一倍、丈夫なんだ」

「そうじゃなくて、お金あるんですか？　スリにあつたんでしょう？」

ロングも立ち上がり、平気な顔で私を見下ろした。「おまえが払うんだ。必要経費だろ？」

「自分で飲んだコーヒー代は払います」

「けちけちするな。自分の金でもないくせに」

もう何を言つても仕方がないような気がしたので、私はポケットからサイフを引っ張り出した。

通りに出て、馬車を拾つた。この時代のロンドンには、金を取つて客を乗せる辻馬車が何千台も走つていて、現代のタクシーと同じように気軽に利用することができた。その辻馬車にロングが乗り込むとき、大きな身体のせいで、ひっくり返ってしまうのではないかと思えるぐらい車体が傾いた。「おつとつ」と御者がつぶやく声が聞こえた。

北風ホテルにはすぐに着いた。馬車を降りてロングがさつさと歩いていくので、私は半分駆け足のようにして、急いで歩かなくてはならなかつた。ロングが正面玄関ではなく、裏口をめざして歩いていることに気がついた。建物のわきを抜け、花壇の隣を行き、堀にそつて進んだ。

「どこへ行くんです?」息をつきながら、私は言つた。『そつちは裏口ですよ。メイドの佐藤に会つんじゃないんですか?』

「何のために?』

「えつ?』

『いいから黙つてついてこい』

私たちはホテルの裏手に出たが、正面とは違つて、ここはかなりみすぼらしかつた。古びたレンガ塀に囲まれていて、花壇などもなく、すみには雑草が生えている。ぬかるんだ地面には、よく見るとタバコの吸ガラが散らばつている。荷物を積んで出入りしたらしい馬車のわだちがいくつも残つている。

ロングは私の前を歩き続けた。やがて小さなドアに行きあたつた。木でできた安っぽいもので、もちろんここも宿泊客たちの目に触れる場所ではない。ロングは気軽にそのドアを開け、中へ入つていった。私は少しだめらつたが、ロングが振り返つて「こいよ」というので、ついていった。

ドアを入ると、すぐに急な下りの階段になつていた。幅の狭い真っ暗なものだ。天井を見上げたが、もちろん明かりなどはなかつた。足を踏みはずさないように注意しながら、私はロングの後をついていつた。再びドアがあり、ロングがそれを開けると地下室のような場所に出たが、空気がむつと暑いことに気がついた。

『やはうこにあつたな』とロングがつぶやくのが聞こえた。

前を向くと、鉄製の筒のようなものが目に入った。巨大な水タン

クを横倒しにしたような形で、分厚い板を組み上げて作ってある。すぐにボイラーだと気がついた。ホテルの部屋に暖房用の蒸気を送るための機械だ。この暑さは、その内部で燃えている石炭のせいだろつ。私は帽子を脱ぎ、マフラーをはずした。

ロングはボイラーの前にかがみ、仕組みを調べているようだった。足元の床には、スコップからこぼれた石炭が散らばっている。鉄でできたハッチのようなものがあり、そこから石炭を中へくべるようになっている。ハッチの大きさは、手足をまっすぐに伸ばせば私もでも何とか通り抜けができるようなぐらいだ。

「心持ち狭いが、仕方ねえな。あの女も、ここまで来たことはなかれ」「とロングがつぶやくのが耳に入った。

「何の女のことなんですか？」私は言った。

ロングは振り返り、歯を見せてにっこり笑った。
「なんでもねえよ」

階段を降りてくる足音がし、ドアが開く音が聞こえたので振り返ると、背後のドアが開いて、女が一人入ってきたところだった。女もすぐに私とロングに気づき、驚いた顔をした。

年は二十歳ぐらいで、制服を着ていたから、このホテルの従業員に違ひなかった。階段を降りながら火をつけたのか、手の中にタバコを持っていた。私とロングを見つめ返し、かすかに笑って、口から煙をはき出した。

「見かけない顔ね。こんなところで何をしているの？」

髪を整え、レースの髪飾りを乗せ、上品に化粧をしていたが、言葉づかいはあまりマッチしてはいなかつた。もつと派手な口紅を引き、田の上にクレオパトラのような濃いシャドーを塗つたほうがよっぽど似合いそうな感じだ。だがこの女も、私がここに宿泊客だとは気がついていないようだつた。

「いよいよ、ベッピンさん」ロングはにんまり笑つた。

「何よ。変な男ね」と女は言つたが、それでもうれしそうに笑つてゐる。私は黙つて見ていることにした。

「調子はどうだい?」自分もタバコを取り出してくわえながら、ロングが言つた。

「まあまあつてとこ」ね。あんたたちは何者?」女はタバコを突き出し、ロングのそばへ持つていつてやつた。ロングは顔を近づけ、自分のタバコに火を移し取つた。

「おたくの支配人から、ボイラーの様子を見てくれといわれた。最近調子が悪いんだつて?」

「そうなの? 聞いてないわよ」女は不思議そうな顔をして、指でトントンとたたいて、タバコの灰を床に落とした。

「ならないんだ。支配人の勘違いかもしけねえ」ロングは笑つた。
「おおそうだ。ついでだから教えてくれよ

「何さ?」

「昨日の朝だつたか、大きな木箱を積んだ馬車がこのホテルから出

「ていつただろう？・ 棺^{かん}おけぐらいの大きさの箱でさ」

「それがあんたと何の関係があるの？」女はタバコを口から離し、天井に向けて、煙をふうっと吐き出した。

「どいつもこもねえよ」ロングの声の調子が変わった。「オレはすぐそここの道を歩いてたんだ。そしたらその馬車が出てきて、泥水をはねかけやがった。見てくれ。教会へ行くとき用の最高のズボンが台無しだぜ。今日こそは神父様のところへ百ポンドばかり寄付しに行こうと思つてたのが、あきらめるほかねえな」

いかにも残念そうな顔をして、ロングはしわだらけのズボンを指さした。噴き出すようにして、女はふつと笑い始めた。

「それは氣の毒ね。でもその馬車のことを調べて、どひつみつつこのの？」

「御者を同じ田にあわせてやるのぞ。首根ひきをつかんで、チームズ川の泥の中でたんと遊ばせてやる」

「まあお好きに」女は笑い続けた。「どこの馬車屋かは知らないわ。張替えをするために、古い長イスを家具屋へ送り返したのよ。駅へ持つていったのだと思つわ。支配人が知つていいはずよ。きいてみたら？」

「ああ、恩に谢るぜ」

タバコを吸い終えて、女は吸ガラをボイラーの中にぽんと放り込んだ。だがすぐにロングはポケットからもう一本取り出し、女の前に差し出した。

「まあ、もう一本どうだい？」

「あら？」 意外そうにまゆを上げて、女はロングを見つめ返したが、タバコは受け取った。「何か下心がありそうね」

女が口にくわえたので、今度はロングが火を移し取らせてやった。

「オレは今、ちょっとやばい立場におかれちまつててな」 ロングは意味ありげに笑い、声をひそめた。

「何なの？」

「あの小娘のことさ」 ロングは私を振り返り、タバコを持った手で軽く指さした。

「あの女の子？」

「ああ」 いかにも重大な秘密だとでもいうように、ロングは女の耳に顔を近づけた。「あの東洋人の男たちは、もうチョックアウトしちゃう？」

「東洋人？ 宿泊してたお客のこと？」

「そうだ。一人か三人いたと思つんだが」

「なぜ知ってるの？ あの二人は昨日の朝早く、緊急の仕事ができただとかでバタバタとあわただしく出発していったわ。部屋代は三週間分前払いしてあつたから、清算が大変だつたみたいよ」

「それは確かかい？」

「間違えつこない。辻馬車を呼んでもうたらチップをはずんでくれたから、よく覚えているわ」

「ジーニーの国人間だと黙ってた?」

「さあ」女は困ったような顔をした。「お密の詮索せさんしやくをするのは私の仕事じゃないしね。だけどあの密とその女の子と、ジツ関係があるの?」

女に見つめられても、ロングは表情も変えなかつた。
「秘密を守れるかい?」

「ええ、もちろん」タバコを持ったまま、女は軽く右手を上げてみせた。

「！」娘は、いかにも頼りないまぬけ面をしているが、実はさる国王の血を引く跡継ぎなんだ

「まぬけ?」女は首をすくめ、私を盗み見た。

「気にする」とはない。こいつは英語はあるつきりわからねえ。それが血みどろの跡継ぎ争いに巻き込まれちまって、命からがらロンダンまで逃げてきたといつわけさ。だが敵もさるもの、ここまで刺客かくを送り込んできたといつわけだな」

「あの二人が刺客なの?」女は目を丸くした。

「ああ、だが姿を消したといつことだな。まあいい。オレはこの娘を連れて、しばらく田舎いなかにでも身を隠すぞ」

「そのほうがいいわ」女は再び、ちらりと私を見た。「若いのに氣の毒ね」

「もう心配することもないわ」ロングは気軽に続けた。「とにかくありがとうよ。いろいろ教えてくれて」

「ええ。あんたもその子には氣をつけてやつてね」

女はタバコを吸い終え、上の階へ戻つていった。

北風ホテルを出て、再びロングと一緒に辻馬車に乗つて、駅へ行くことになった。駅はホテルから数分のところにある。

だが町の通りをいくらも進んでいないところで、ロングは不意に御者に声をかけて、馬車を止めさせた。そこは大きな交差点のそばで、自分でドアを開けてロングがひょいと飛び降りたので、もちろん私もついていった。「待っていてくれ」とロングは御者に言い、目の前の店の中へ入つていった。

私は立ち止まって見上げたが、ロンドン市内ならどこにもあるような普通の肉屋だつた。ペンキで描かれた大きな看板が店の前にかけてあって、牛と豚の絵がある。ロングは店の中でもう主人と話し始めていたので、私もあわてて店の中に入つて、会話を耳をすませた。

「そんなもの、何になさるんです?」肉屋の主人が、不審そうな顔でそう言うのが聞こえた。丸い帽子をかぶり、パイプをくわえ、白い大きなエプロンをした男だ。手にしている肉切りナイフは、菜切り包丁のように四角い。

「飼い犬にやるのさ」ロングが言いわけくさく言つた。

「犬？」肉屋は不審そうな表情を変えなかつた。「どこの世に、焼けこげた牛の骨をかじるのが好きな犬がいるつていうんです？」

ロングは大げさにため息をついた。「それがわが家のブラック大魔王様なのさ」

「何の話をしてるんです？」

「犬の名さ。ブルドッグとチワワの雑種でな。それでもなぜか大きさはセントバーナードにも負けないといいやんちゃ娘だ」

「セントバーナードつて、でかい犬ですぜ」

肉屋はさらに不審そうな顔をしたが、ロングはかまわず続けた。
「ブラック大魔王様は最近ごきげんが斜めでな。じんと家に帰つても、玄関から中へ入れてくれないんだ。入口のわきに陣取つたまま、オレをにらみつけ、うなり、ほえるんだ。オレはもう三日も寝室に入れずに入り込んだぜ。ずっとトイレのわきで寝泊りしてゐるんだ。頼むからオレを助けてくれよ。焼いた骨をちゃんと鼻先に置くだけで、ブラック大魔王様は天使のようになるんだから」

今度は、肉屋がため息をつく番だつた。

「わかりましたよ。骨をストーブの中へ入れて焼けばいいんですね。灰がつかないように、上から針金でぶら下げときますか？」

「いやいや、ブラック大魔王様は灰の味が大好きときたもんだ。灰をくつつけとかないと、オレは食い殺されちまつよ」ロングは大げさに身体を動かし、恐ろしくてたまらないという表情をした。

「わかりました。じゃあ、このまま放り込みますよ」

私とロングの田の前で、肉屋は牛の骨を一本つまみ上げ、ストーブのふたを開けて、その中へ放り込んだ。炎を上げて燃えているまきの上に、骨はコロンと乗った。

「おお、ありがとうございます。これで今夜はけつをかじられないですみます。恩にきますぜ、旦那。すっかりいいぐあいに焼けたころ、また取りにきますんで」

私とロングは肉屋から出てきた。肉屋の主人は、まだ不審そうな顔をして見送っていたが、私たちは馬車に飛び乗った。御者がムチをぴしゃりと鳴らし、すぐに駅に着いた。だが私たちが馬車から降りたのは、正面の入口ではなく、貨物用プラットホームがある裏口だった。

鉄の大きな門が開いていて、中は広場のようになっている。荷馬車が何台もとまつていて、木箱や荷物が大小、何百個もゴチャゴチャと乱雑に置かれている。地面は、ボール紙の切れっぱしや木くずでおおわれている。そんな中を、手押し車を押したり荷物をかついだりした男たちが行き来し、ひどく混雑していた。

ロングは元気よく歩いていった。私は、また急いでついていかなくてはならなかつた。広場をまっすぐに横切り、木箱や男たちをかき分けて、事務所の建物へ近づいていった。ロングは入口のドアに手をかけた。

事務所の中はだだつ広く、いくつも机が並んでいた。だが人は一人しかおらず、一番奥にある大きな机について書類仕事をしていた

が、顔を上げてじつちを見た。

「あー」ロングが話しかけよつとした。

「あんたね」男はぶつきらいぼうに答えた。「私は忙しいんだ。誰だか知らないが帰つてくれ」そして、また書類仕事に戻つてしまつた。それでもロングは、トコトコとそばまで歩いていった。男がもう一度顔を上げたので、のぞき込むよつにして話しかけ、軽くウインクをしてみせた。

「オレは探偵助手なんだ。ホームズ先生はいま別の件でお忙しくてな。オレが下調べを任されてる。ホームズ先生は、ある荷物のことを探りたがつていなさるんだが……」

男は目を丸くした。イスをガタガタいわせて立ち上がつた。

「シャーロック・ホームズさん？　あの有名な？」

ロングは黙つてうなずき、ポケットから小さなカードのようなものを取り出して、男の鼻先につきつけて見せた。男は手を伸ばし、受け取つて眺めた。私も首を伸ばしてのぞき込んだ。どうやら名刺らしい。『私立探偵シャーロック・ホームズ助手　ジョン・ロング』と書いてある。

男の顔色が変わつた。

「ホームズ先生の『』活躍は、いつも雑誌で拝見させていただいておりますよ」男はものす『』くうれしそうな顔をして、両手を差し出してロングの手をつかんだ。ぶるんぶるんと握手をする。

ロングは、いつやつたやくよつと言つた。

「昨日のことなんだが、荷物のことで何かありませんでしたかねえ。列車が着くのが遅れたとか、何かが紛失したとか」

男のほうも声を小さくして答えた。「ああ、待つて下さいよ

ロングは待っていた。

「そういえばありましたよ」男は話し始めた。「見たこともない東洋人の女がここに来ましてね、大きな声でガチョウみたいにガアガアわめきやがったんです。うるさくって、たまりませんでしたよ。

その女の言うことにや、これが笑っちゃうんですが、亭主がボンクラな野郎で、どつかに送る木箱の中に飼い猫を入れたまま、知らずにフタを釘づけして、この駅で発送手続きをすませちましたんだそうで。猫がいなくなっていることに気づいた女が、必死になつて追いかけてきたってわけでも。だから女は、『その木箱がどこにあるのか教える』って言うんです。でもこの広い駅ですぜ。木箱なんて何百もあるんだ。いちいち探してなんかいられませんや。

私はそう言ってやつたんですがね、今度はその女、『じゃあここにある木箱をせんぶ調べさせろ』って言いやがつて。こいつだつて忙しいし、そんなバカなことにはつき合つていられないと言つたんですね、でかい声を出して泣いたりわめいたりするもんだから面倒になつちまつて、駅中の木箱を勝手に調べることを許してやつたんですよ。

猫が入っているはずの木箱は、大きくて細長くつて、ちょうど棺おけぐらいの大きさなんだそうで、それくらいの大きさの木箱を探して歩いてましたよ。似た木箱はいくらだってありますからね。何十個も調べてました」

「それで、目的の木箱は見つかったのかい？」

「いいえ。もう発送されてたらしくて、見つかりませんでした。しょんぼりした顔で私のところへ戻ってきたんで、『届け先の駅に問い合わせてみるといい』と言つてやつたら、しぶしぶ帰つていきましたよ。自分で問い合わせたからと思ひますね」

「それははどうだうかね」ロングはつぶやいた。

「え、なんですか？」

「いや、いいんだ。ありがとう。きっとホームズ先生もお喜びだろうよ」ロングは男に礼を言つて、私のほうを向きかけたが、再び振り返つて男を見た。「その東洋人の女は、片言の英語をしゃべったのかい？」

「いいえ」男は首を横に振つた。「流暢なもんでしたよ」

「年はどのくらいだつた？」

「そうですねえ、中年つてとこですか」

私とロングが部屋を出でていこうとするとき、男がまた言つた。「このお名刺、いただいてもいいんですね。女房にも見せてやりたくて」

「もちろんでさあ」

私とロングは事務所を出た。また荷物と男たちの間をぬつて歩き

はじめた。歩きながら、声を小さくして私は言った。

「あんなウソをついていいんですか？ 名刺まで用意して」

ロングは平氣な顔で答えた。「かまやしねえよ。現実と小説の区別もついてないやつらのことなんか、気にする」とはねえ」

再び辻馬車に乗つて、北風ホテルに戻ることになった。ロングがステップに足をかけて、馬車の車体が大きく傾くと、馬が居心地悪そうに足踏みをした。ホテルに向かう途中で、もちろんさつきの肉屋に立ち寄つて、ロングは『いい具合に焼けた』牛の骨を手に入れだ。「あちあちあち」と言いながらハンカチに包み、上着のポケットに入れた。

ロングと私は、北風ホテルの正面で馬車を降りた。せかせかした足取りで玄関を入りながら、ロングが言つた。

「メイドの佐藤は、たしか英語はしゃべれないんだつたな？」

「ええ、だから私が通訳なんです」

「ああ、そうだつたな」

階段をいくつか上がり、赤いじゅうたんが敷かれた廊下を通り、加奈の部屋の前に着いた。このホテルで一番上等な部屋で、大きなリビングと寝室とバルコニーと、作りつけの小さなキッチンがある。建物の角にあって、とても日当たりがいい。窓の外には、噴水のある中庭の景色が広がっている。使用人のための小部屋も付属していて、佐藤はそこで寝起きしていた。

ロングがノックすると、佐藤が中から開けてくれた。佐藤はいつものようにすきのない感じで、きちんとドレスを着ていた。つねに髪をきつくひつめているが、この時は少しおくれ毛があり、白髪も普段よりも多く見えるような気がした。いつもはないしわが目の下にできいて、ひどく疲れている様子だったが、泣いていたのではないようだった。話すときに、少し唇が震えるのが目についた。

「冬子さん、遺体が見つかったことはお聞きになりましたか？」佐藤が言った。

「ええ、ゴーラード警部が知らせに来てくれました。だから今、この探偵さんと一緒に捜査を……」

突然ロングが大きな声で話し始めたので、私はひどく驚いた。私は目を丸くしていに違いないが、ロングはおかしな表情で見つめ返して、にっこりと笑った。ロングは英語でこう言ったのだ。

「心配にはおよばんよ、マダム。見つかった死体は別人だとわかった。加奈の死体ではなかつたんだ」

私には、ロングを見つめ返すことしかできなかつた。ロングは軽く私をつつき、また言った。

「さあおまえ、いまオレが言つたことをこの女に言つんだ」

「でも……」私はせわやかに返事をした。

「バカ」ロングは私をさえぎつた。「通訳をしろ。役立たず」

仕方なく、私は佐藤のほうを向いた。「見つかった死体は別人でした。加奈さんではありませんでした」

「そうなのですか」佐藤は息をついた様子だった。

私とロングは居間に通された。広い部屋で、壁も天井も真っ白に塗られ、淡いピンクのじゅうたんの上にふかふかのイスやテーブルが並んでいる。暖炉もあって、火が入っていた。

「おかげになつて下せい」と佐藤は言おうとしたが、もうロングは勝手に長イスに座つてしまつていた。

私はロングと並んで座つた。私はひざを曲げて、ほんの軽く腰かけただけだが、ロングはゆつたりと深く座つて、いかにも楽し

そうにしている。今にも「ヤーヤヤ笑い始めるのではないか」という感じだ。この男の頭の中はどうなっているのだろうとこう気がした。

ロングの体重のせいで、クッショーンはペチャんになってしまっている。佐藤も腰かけたが、身体の前でずっと両手を組んでいた。その様子はあまりにも固く、まるで石でできた女のような感じだ。私にも佐藤にも、特に話すべきことはなかった。一分かそこいら、どことなく気まずい沈黙が続いていたのだが、不意にロングが口を開いた。

「すまねえが、何か飲ませてくれねえかなあ。のどがかわいちまつてさ」

あまりにも無神経なので私はあきれてしまったが、そのまま通訳するしかなかつた。

「お茶をいれましょ」佐藤が立ち上がり、背中を見せてキッキンへ向かつた。

「悪いね」

少しして、佐藤が盆を持って戻ってきた。私とロングの前にカップを置き、茶をつぎはじめた。

「あれ、佐藤さんは飲まないんですか?」と私は言った。佐藤は二つしかカップを持ってきていなかつたのだ。

「私はいただきたくないませんので。よろしければ、お菓子もどうぞ」佐藤は、小皿に乗せたクッキーをこちらに滑らせてよこし、すぐ下を向いてしまつた。空腹だったので、私はクッキーに手を伸

ぱわつとした。

「おひとすまねえ」

ロングの大きな声がした。カチャンとこう音も聞こえた。

ロングの足下にティーカップが落ちて、割れてしまっていた。紅茶もこぼれて、じゅうたんの上に広がっていきつつある。

「私の手が当たりましたか?」そんなはずはないと思いつながら、私は言った。

「いや、オレのせいだ。つかつなどだよなあ。すまねえが、ホテルのメイドを呼んでくれねえかな」

「後片づけなら私が」佐藤が立ち上がりうつした。

「それでは申しわけねえや。ホテルの人間を呼んでくれ」ロングはくり返した。

「私が呼んできますよ」私は立ち上がった。

「や!」の「佐藤が言った。「廊下を右へ行つたつきあたりに地下へ続く階段があつて、そのわきに控室があります。メイドはそこへいるでしょ!」

「や!」はボイラー室の真上かね?」ロングが言った。

佐藤は一瞬、ぽかんとした顔をした。それから顔を赤くし、なんとか感情を押さえ込んだようだった。「はい、そうです、

ロングがくすくす笑いはじめた。私はぽかんと見つめていた。

「ロンドンの空気には、吸っているだけで英語が話せるようになる奇跡の力がそなわっているのかもしだねえな」ロングは笑い続けた。
「なあ佐藤さんよ。あなたは、いつの間に英語ができるようになつたんだい？」

私もやつと気がついた。ロングはすました顔で続けた。

「そのボイラーだけだ。ホテル全体を暖房するためのものだから、かなりのサイズだよな。死体の一つや二つ、簡単に燃しちまえるぐらいいのれ」

佐藤の顔が再び赤くなり、すぐに真っ青になつた。ロングは静かに続けた。

「そうだろう?」

「何の証拠があつて……」佐藤は大きな声を出した。

「さつきボイラー室へ行つて、灰の中をかき回していたら、こんなものが出てきた」

ロングは上着のポケットに手を入れ、ハンカチに包んだものを取り出し、テーブルの上にそつと置いた。

「なんですか？」

「自分で開けてみなよ」

長い間ためらつていたが、とうとう佐藤は手を伸ばした。その手が震えていることに気がついた。佐藤の指が触れ、ハンカチのはし

をそつと引いた。『ロンとひっくり返って、焼けた骨がテーブルの上に転がり出た。佐藤の身体がびくんと動いたが、悲鳴は上げなかつた。

「そんなはずはありません。あのときは長イスを燃やしたはずです」佐藤はロングをにらみつけた。

「だがそれを、あんたは自分の目で確かめたわけじゃなかろう？　あんたが駅でやつた芝居は、はじめからまったくの無駄だったわけや。あの男たちはとんだ食わせ者や」

真っ青な顔をしたまま、佐藤は首を横に振り続けた。そしてそのまま、長イスの上にどたんと氣を失ってしまった。

ロングに命じられてフロントへ走つていき、すぐには「ゴーラド警部を呼んでもらつた。

ゴーラドは十五分もしないうちに現れたが、何もかも一から説明してやるのが面倒ならしくて、ロングはとても機嫌が悪かった。

すでに佐藤はベッドに横たえられていた。佐藤はまだ目を覚まさず、気になつたので私はそばについていた。ドアは半開きのままだつたから、ロングがゴーラドに事情を説明してやつて居る声が、隣の部屋から低くぼそぼそと聞こえてきた。

「だから『ゴーラドの旦那』 ロングはいらっしゃるようだつた。
「佐藤が犯人なんですよ。凶器は何かって？ 動機？ そんなこと
オレは知りませんよ。調べるのは旦那の仕事でしょう？ フイッシュ
ユはオレに犯人探しを依頼しただけなんだから。

ええ、そうです。佐藤が加奈を殺しました。同じ夜、このホテルには二人の東洋人が宿泊していて、日本人であることはまず間違いありませんが、死体を始末するのを手伝つたんです。家具屋に送り返す予定で梱包されていた長イスを木箱から引っ張り出し、代わりに死体をつめました。

その長イスはどうしたのかって？ ボイラーで燃しちまつたんじやないですかね？ 翌朝、ホテルの連中は何も知らずに、死体入りの木箱を駅へ運んだんです。

その二人組が、なぜ佐藤に協力したのですつて？ それも知りませんな。それを調べるのも旦那の仕事でしょう？ もう遅すぎるかもしけないが、人相はわかつているわけだから、駅や港に手配したらどうです？

ええ。佐藤は駅へ行き、一芝居演じました。詳しいことは駅員にきいてください。シャーロック・ホームズ好きな駅員がすべて話してくれますよ。混雜した貨物駅の中で、佐藤は荷札を張替える工作をしたんです。二つの木箱の荷札を交換したんですよ。

あんなに騒がしい場所だから、誰も気がつかなかつたでしょう。だから死体は石膏像と入れ替わつて、全然関係のない家へ行つてしまつたんです。

ええ、支配人から住所を聞いて、家具屋へも行つてみたらどうですか？ 古ぼけた長イスが入つているはずなのが、なぜか石膏像が入っている木箱が届いて、きっと頭をかかえているはずですぜ……」

不意に手をつかまれ、私は驚いて振り返つた。ベッドから身体を起こしかけている佐藤と目が合つた。

「お嬢様、この罪はすべて私に着せてください」佐藤がさやいた。

「でもおまえは…」

「お嬢様には、まだするべきことが残っているはずです。そのためであれば、私は喜んでしばり首になりましょう。さあ、ロングたちが話をやめました」

耳をすませると、隣の部屋の話し声はもうやんてしまっていた。
一人の男たちが近寄つてくる足音がする。

「よろしいですね」

佐藤は最後にそういって、田を閉じて、まだ気を失っているふりをした。ゴーラドが入ってきて、私を部屋から追い出した。

加奈のヨーロッパ旅行はこうじう結末に終わり、私は一人で日本へ帰ってきた。そして女学校の寮に戻ったのだが、ある日叔父がやつてきて、こういったのだ。

「冬子、私は仕事でロンドンへ出張することになったんだが、一緒に行かないか？」

もちろん私は、^{はづこ}張子のトラのように首を縦に振った。一ヶ月後には、胸を潮風でいっぱいにしながら、汽船のデッキにいた。大陸行きの船で、東京湾の水はウーロン茶のような色をして、嫌な匂いを放っていたが、まったく気にならなかつた。叔父はもう船に酔つて船室で伸びていたが、私は元気いっぱい、デッキの上を何回も往復して歩いた。

数日後には大陸の港に着き、列車に乗り換えた。一週間後、とうとうフランスに着いた。ここでまた船に乗り換えて、海峡を渡つて、イギリスに上陸した。列車に乗つて半日走つて、とうとうロンドンに着いたのだ。

叔父はある鉄道会社で働いていて、その会社がロンドンのE B B C社に電気機関車の製造を依頼し、それが完成したと連絡があつたので、こひやつて受け取りに来たのだった。

ロンドンに着いても、数日の間は叔父のおともをして、機関車工場や船会社など、あちこち歩いた。だがそれもすんだので、一人でロンドンの町を見物して歩くよくなつた。叔父も何か用があるとかで、毎日どこかへ出かけていた。

その日、私がホテルへ帰ってきたのは午後六時ごろだが、叔父はまだ戻ってきてはいなかつた。空腹だったので、レストランで一人で食事をした。だが夕食を終えても叔父は帰つてこなかつた。ホテルの従業員にきいてみたのだが、叔父は昼前に出かけたが、どこへ行つたのかはわからないという返事が返つてきただけだつた。

私は部屋へ戻つた。十時をすぎても叔父は現れなかつた。待つても仕方がないので、ベッドに入つて休むことにした。毛布にくぐるまり、一分後には眠り込んでしまつていた。

だが真夜中すぎ、ドアを強くノックする音で目を覚ました。私は身体を起こして頭を振つたが、ノックはまだ聞こえている。部屋の中は真つ暗だつた。カーテンに手を伸ばして、外のガス灯の明かりを入れ、時計を見たら午前一時だつた。

ベッドを出て、裸足のまま歩いてドアを開けにいった。ドアの外には一人の男が立つっていた。顔には見覚えがあつた。

「『ゴーレド警部？』廊下の明かりがまぶしいので、私は目をぱちぱちさせながら言つた。

「一年ぶりですかな、冬子さん」ゴーレドも言つた。

「何の御用ですか？ まだ夜中ですよ」

「それはわかっています」ゴーレドの表情がいかめしく変わつた。

「あなたの叔父が殺害された件について、おたずねしたいことがあります。署まで来ていただきましょう」

「えつ？」

「すぐに着替えてください。三分差し上げます」

私にはどうすることもできなかつた。すぐに着替え、部屋から連れ出されるしかなかつた。手錠をかけられたりはしなかつたが、ゴールドと婦人警官に連れられて、私は階段を降りていつた。ロビーを横切るとき、心配そうな顔で支配人が見送つてくれたが、何も言わなかつた。

通りは暗く、人通りもなかつた。黄色いガス灯の暗がりに隠れるようにして、真っ黒に塗られた警察馬車が止まつていて見えた。ゴールドはドアを開け、私をその中に押し込んだ。御者がムチを鳴らして、馬車は動き始めた。

「叔父さんが殺されたんですって？」私は言った。

意外にも、ゴールドはかすかに微笑んだ。

「叔父上は昨日の午後三時ごろ、地下鉄車内で死亡しているのが発見されました。座席に腰かけたきり、まったく動かないでの車掌が不審に思い、振り起こそうとしたら死んでいたのだそうで。検視の結果、体内から毒物が発見されました。

詳しい分析はすんていないので、毒物の名称まではまだお答えできませんが、いつぶくも一服盛られたのは間違いありません。ポケットを調べてもサイフは見つかりませんでした。犯人が持ち去つたのでしょうか

馬車は警察署に着いた。私は降ろされ、婦人警官たちに手を引かれて、建物の中へ入つていつた。

ひどく心細かつたが、玄関を入つてすぐのところに小さなホールがあり、ロングがいて、あたりを見回していることに気がついた。一年前と変わらず、しわしわの服装をして、髪の毛はぐしゃぐしゃで、無精ひげが生えている。私に気づき、重いブーツをドタドタイさせながら近寄ってきた。

「ロング大尉、なぜこんなところにいるんです？ まさか、この事件と何か関係があるりなんですか？」ゴールドが声を上げた。

ロングはポケットから何かを取り出し、手に持つて振り回した。タバコの箱ぐらいの大きさで、そう重いものではないようだ。

「旦那はこれを、内務省へお届けになつたんでしょう？」

「ええ」ゴールドはうなずいた。「被害者のポケットの中についたものです、正体がわからなくて、意見を求めたんです」

私がじつと眺めているものだから、ロングはそれを私に向けて差し出した。私は受け取つて眺めた。

金属製の板だ。だが普通の金属とは違つて、金色と銀色の混じつた不思議な色合いをしている。半分に割つたパイプのような形で、ネジでとめる穴が二カ所あけてある。見かけよりもずっと軽いのも不思議な感じだ。薄っぺらいのにひどく固い。思いつきり力を込めても、そう簡単には曲がらないだろ？と思える。鼻を近づけてみたが、匂いはまったくなかつた。

顔を上げ、私はロングとゴールドの会話に耳をすませた。私の手の中にある金属板を指さし、ロングが再び口を開くところだった。

「そいつの正体が内務省にもわからなくて、もしやとこうことで海軍に問い合わせたんです。それで大騒ぎになつて、オレが駆り出されってきたってわけでああ」

「大騒ぎといいますと？」

ロングはしかめつ面をして、もう一度ポケットに手を入れ、今度は一枚の紙を取り出した。広げてゴールドの鼻先に突きつけた。ゴールドも顔をしかめたが、受け取つて眺めた。

「なんです？」

「（）の件についてはすべてをオレにまかせるつて委任状です。海軍大臣と内務大臣のサインがあるでしょ？ 今やオレは、この事件の捜査をすべてまかされた身つてわけですよ」

「どうと？ 私には意味がよくわからないのだが？」

「要するに、その金属板と小娘はオレが預かるつてことです。オレもこんな仕事はやりたかねえが、おまんまは食わなきやならないんでね」

そんなふうにして、私は警察署から連れ出された。ゴールドは不満そうな顔をしていたが、何も言わなかつた。

すぐにロングは辻馬車を呼び、私を車内に押し込んで、ホテルへ送り届けさせた。自分はそのまま徒步で闇の中へ消えていったので、どこへ行つたのかは知らない。

翌日、私はとても忙しかつた。朝食をすませて、すぐに町へ出かけた。まず大使館へ行き、叔父が殺害されたことを伝えた。そのあ

と、日本へ向けて電報を打つた。あて先は、叔父が働いていた鉄道会社にしておいた。

『叔父死ス。指示ヲ求ム』

返事が来るまで、数日待たなくてはならなかつた。E B B C 社へ行き、叔父の死を告げると社員たちはひどく驚いた顔をしたが、「電氣機関車の引き渡し準備は予定通りに進める」と言つた。

たくさん的人に会い、すっかりくたびれて、夕方私はホテルに帰つてきた。ロビーに足を踏み入れると、退屈そうに新聞を読みながらロングが待つてゐるのが目に入つた。そばのテーブルには灰皿があり、吸ガラでいっぱいになつてゐる。何本も何本も、まるで蒸気機関車のように煙を噴き上げ続けたのだろうが、ロビー全体が煙くさくなつてゐるような気がした。

ロングも私に気づき、片手を上げて合図を送つてきた。少し離れたところから、支配人がありがたくなさそうな顔で眺めていたが、その表情には気がつかないふりをすることにした。

「おう、帰つたな。今田はどんな一田だつた?」ロングが言った。

「大使館やE B B C 社へ行つて、とても忙しかつたわ」私はロングの向かい側に、ドスンと腰かけた。

「E B B C 社は何か言つてたか?」

「ううん」私は首を横に振つた。

「そうかい」

ロングはまだ新聞紙を手にしたまま、何秒か黙っていた。考えごとをしているようだつたので、私は邪魔をしないように静かにしていた。少ししてロングが口を開いた。

「おまえは明日もＥＢＢＣ社へ行くのか？」

「いいえ、用はないから行かないわ」

「行けよ」

「えつ？」

「明日、オレをＥＢＢＣ社へ連れていくんだ」

「どうして？」

「いやいや、うるさいガキだなあ」ロングは新聞紙をイスの上に放り投げた。「オレは向学心にあふれているから、電気機関車のことが勉強してえんだよ。ああ勉強したい勉強したい」

仕方なく、連れていいくことを約束するしかなかつた。

ロングとは翌朝、再びホテルのロビーで待ち合わせた。

ロビーが煙だらけにならないように、私は早めに行つて待つていた。ロングはすぐに現れた。そのあと辻馬車に乗つたが、車内でもロングは盛大にタバコを吸い始めたので、私は露骨に嫌な顔をしてやつた。だがロングはにやりと笑うだけで、何も言わなかつた。私

は窓を開け、ゲホゲホとわざと大きなせきをしてやつた。

「ああそうだ」私は突然思い出した。

「どうした？」ロングは六本目のタバコを吸い終え、吸ガラを窓の外へ投げ捨てたところだったが、私をじろりと見た。

折りたたんだ小さな紙をポケットから取り出し、私はロングに手渡した。

「叔父さんが読みかけていた本のページに、こんなものがはさんであつたの。何かのメモみたいよ」

ロングは不審そうな顔をして紙を広げたが、すぐに表情が変わった。

「メモねえ」

『12・ビール・ボトル』

「意味がわかる？」私は言った。

「ビールびんが12本ということか？ おまえの叔父はそんなに酒飲みだつたのか？」

「いいえ、ほとんど飲めない人だつたはずよ」私は肩をすくめた。

「ふうむ」ロングは小むずかしい顔をして考え込んでしまつたので、ほつておくこととした。

ロングが見かけほどバカな男ではないということを、私はよく知っていた。だが私も完全に信用し、すべてを話していたわけではない。このメモを叔父の本の中で見つけて、意味がわからなくて当惑しているのは事実だつた。だがそれ以外の事実を、私はロングにはほとんど話してはいなかつたのだ。加奈の事件のときも、このひげ面のバカのおかげで、私は警察から疑われることすらなかつたのだ。木箱から長イスを取り出し、かわりに加奈の死体をつめる手伝いをし、その翌朝あわただしくホテルを離れていった二人の共犯者など、ロングの空想にすぎないのだ。

叔父が死んだ日のこともそうだ。あの朝私は、叔父と一緒に町へ出かけ、地下鉄に乗つたのだ。叔父はチョコレートに目がなく、私がポケットから小箱を取り出してフタを開けてみせるだけで、にっこり笑つて、何一つ疑うことなく、つまんで口に入れたのだ。それが人生最後の一囗になるとは、思つてもいなかつたに違ひない。

地下鉄の車内はよくすいていたから、駅に着いたときをみはからつて、叔父の死体を残してさつと下車するのは難しい仕事ではなかつた。ポケットの中にあつた叔父の持ち物も、強盗事件に見えることを期待して、私がぬき取つたのだ。そのまま地下鉄の窓から投げ捨てた。

馬車がE B B C社に着き、門番に名を告げると、すぐに工場長が迎えてくれた。私とロングを連れて、工場中を案内してくれた。

とても広い工場で、レンガ造りの背の高い建物の下で火花が飛び散つて、何十人の従業員と一緒にクレーンが音を立てて動いていた。どこかでハンマーを使つている音が、ドカンドカンと常に聞こえている。世界中へ輸出する電気機関車を組み立てている。

ロングはとても熱心で、電気機関車の馬力や電圧、各部の構造とか重さといったことを詳しく工場長に質問していた。わけがわからなかつたが、私は黙つていた。

工場からの帰り道、馬車の中で私は言つた。

「電気機関車はおもしろかつた?」

「ああ、実に興味深い機械だつたな」ロングはニヤニヤ笑つて、私を横目で見た。いかにもするがしこいタヌキのような顔だ。

「どのあたりが?」

タヌキのような顔をしたまま、ロングはおかしそうに私を見つめ返した。

「特にあのでかい車体がさ」

「へえ

「これで今日の仕事は终わりだ。ホテルまで送つてやるよ。だがな、その前にちょっと寄るところがあるから付き合へ。時間はどうせねえ」

「ええ

ロングは窓の外に身体を乗り出して、御者に言つた。

「『沈黙クラブ』へやつてくれ

御者はすぐに了解したようで、次の角で馬車は右へ曲がり始めた。

「何クラブですつて?」

「沈黙クラブか？ オレの親父が所属しているクラブでな。ロンドン中の変人が集まる変人クラブさ。クラブ内に一歩でも入つたら、メンバーはたがいのこと注意を向けちゃいけないって規則があるぐらいだからな。どんな理由があつても、談話室以外では会話もしちゃいけねえときた。それに三回違反したら除名だつてんだから、普通じやねえや。

今の時間なら、親父はそこにいるはずでな。ちょっと頼みごとをしたものだから、返事が聞きたいのさ」

すぐに馬車はそのクラブの前にいたが、私は降ろしてはもらえなかつた。ロングはひょいと飛び降りて、すぐに戻ると言つて、一人で建物の玄関を入つていつてしまつた。

私は窓から眺めていたのだが、黒い石でできた背の低い建物で、ごく小さな看板が正面にかかげられている他は、建物の正体を示すものは何もなかつた。たしかに、人間嫌いたちの隠れ家としてはうつてつけなのかもしれなかつた。

ロングは二分もしないうちに戻つてきて、また馬車が走り始めた。ロングは、小さな紙きれのようなものを手に持つていた。半分に折つたメモ用紙のようなものだ。それで鼻の頭を軽くたたきながら、考えごとをしているようだつた。だが不意に、それをひょいと私のほづへ突き出してよこした。

「見てもいいの？」

何も言わず、ロングは軽く頭を縦に振つた。

私は受け取つて広げた。ちぎり取られてはしがギザギザに破れた紙で、見たこともないほどきたない文字が書いてある。まるでぐら煮えた鍋の中でのたうつタコの足のようだつたが、想像力を総動員して、何とか読むことができた。

親愛なる息子へ。

おまえの推測どおり、一機が盜難にあつておる。日時は先々月の十五日、海軍造船所から煙のごとく消え失せた。極秘で調査中だが、我々はいまだなんらの手掛かりもつかんではおらぬ。

私には、海軍が何の盜難にあつたのやら見当もつかなかつたが、ロングはそれからはまったく口をきかずに、私をホテルへ送りとびけた。

だがホテルに着く直前、翌日もロングに付き合つて、一緒に出かけることを私は約束させられてしまつた。今日とは違つて、午後遅くの夕方近い時刻にということだつたが、同じようにホテルのロビーで待ち合わせることになつた。

ロングと別れて、一人で夕食を食べていると、私あてに届いたという電報をメイドがもつてきてくれた。開いてみると、差出人は日本鉄道会社で、「貴殿を臨時社員に任命するので、機関車を船積みし、至急帰国してもらいたい」という内容が手短に述べられていた。

翌日の夕方、約束した時間が近づいて、私は早めにロビーに下りて待つっていたのだが、やつてきたロングはいつもとは違つて、少し緊張した顔をしているように見えた。

それに今日は、ホテルの前に辻馬車を待たせていた。一緒に乗り込もうとしたとき、油の入った石油ランプといかにも道具箱という感じの木箱が馬車の床の上に置かれていることに気がついたが、余計な質問はしないことにした。私たちが乗り込んで、馬車は走り始めた。

二十分ほど走ってやっと止まり、私たちが降りたのは、町はずれのひとけのない場所だった。ロンドンにもこんな場所があるのかと思えるような風景で、見回しても、岩山と森のようなものしか目に入らない。一軒か二軒、かやぶき屋根の農家が遠くに見えているが、それ以外には本当に何もない。太陽もほとんど沈みかけている。

「じゃなんどこりで何をするの?」私はなんだか心細くなつた。

「ああ?」

ロングは私の前を歩き出そうとしていたが、平気な顔で振り返つた。手には、さつきの石油ランプと木箱を抱えている。ランプのほうはともかく、木箱はいかにも軽々とかかえているから、中身はきっと空なのだろう。石油ランプには炎をおおつかバーのような部分があり、ガラスでできているのだが、そのガラスが赤く着色されていることに気がついた。

「あっちを見るよ」

立ち止まって、ロングは前方を指さした。道が少し下りになり、谷間のよくなところへ通じているのが見えた。そこを鉄道の線路が走っているのも見えた。一本のレールが銀色に光っている。

「汽車の線路だわ」

私はロングを振り返った。ロングはマッチをすつて、ランプに火

を入れようとしていた。ランプはすぐに燃え上がり、ぼんやりとし
た光だったが、赤く輝き始めた。

「それをどうするの？」

ロングはにやりと笑って、ランプと木箱をかかえ、また歩き始めた。

「まあ見てなつて」

私たちは線路へ向かって降りていった。あたりはもうすっかり暗
くなつて、いくらもたたないうちにたがいの顔を見分けることも難
しくなるだらう。線路のわきに立ち、ロングはポケットから時計を
出してきて、ランプの光にかざして眺めた。

「ああ、そろそろへるぜ」

遠くから汽車の汽笛が聞こえてきたのはそのときだつた。すぐに
レールがキンキンと鳴り始めた。

「おまえはそこに籠れていろ」ロングが振り返り、線路のすぐそば
にあつた大きな岩のかげを指さした。

「どうして？」

「言つ通りにしろ。列車が止まつたら、どこでもいいからさつと乗
り込め。オレもすぐに追いつく」

わけがわからなかつたが、それ以上話している余裕はなかつた。
もう汽車のヘッドライトが見え始めていた。私は岩陰に飛び込んだ。
顔だけを出してこつそりのぞき見ると、ロングがランプを高くかか
げ、汽車に向かって大きく振り始めるのが見えた。いかにも道具箱

ふうの木箱をかたわらに置いている。

ロングはランプを振り続ける。赤いランプだ。機関士から見れば、非常信号のように見えるに違ひなかつた。すぐに急ブレーキがかかつた。上り坂だからスピードは出ていなかつたので、完全に停車するのにはいくらもかからなかつた。

ロングが私をちらりと見て、田で合図を送つてきた。私はさつと飛び出し、蒸気機関車のすぐ後ろに連結してあつた車両の手すりをつかみ、ハシゴのようになつたステップを駆け上がつた。そこは広いデッキになつていて、楽に立つことができる広さがあつた。ここなら炭水車が田隠しになつて、機関士に見つかってしまうこともない。

私はそこに立ち、手すりをつかんだまま耳をすませた。ロングの大きな声が聞こえてきた。

「なあ、これはスミス公爵夫人の専用列車かね？」

「なんだって？」機関士が大きな声できき返すのが耳に入った。

「これはスミス公爵夫人の専用列車かね？」ロングは同じことをくり返した。「今日、ポーツマスまでお乗りになるんだろう？　トイレの調子がおかしいから修理をしてくれと言わされて来たんだが」

「あんた、何を言つてるんだ？　これが公爵の専用列車に見えるか？」機関士が身体を乗り出して、後ろを指さす姿が目に見えるような気がした。「これは日本に輸出するための電気機関車だ。今から港へ持つていくところだ」

ロングは、いかにもぼんやりした男という声で答えた。「本当け

? じゃあ公爵夫人の列車はいつ通るんだ?」

「それは昨日のことだ。あんた、酔つ払つて丸一日寝過ごしたんじやないか?」

「そ、そんなバカなことがあるけ?」

「知らねえよ」機関士は大きな声で笑い始めた。「公爵夫人がトレで不自由しなかつたことを祈るね」

「待つてくれ」ロングは声を上げかけたが、機関士は無視してポツと汽笛を鳴らし、ブレーキをゆるめた。大きな笑い声を上げながら、列車を発車させた。

我慢できなくなつて、私は首を伸ばしてのぞき見たが、ロングはいかにも呆然とした表情で突つ立つていた。だが機関士の目が自分から離れると、さつとランプを吹き消し、木箱と一緒に線路ばたに置いて、駆け出すそぶりを見せた。すばやく手すりをつかみ、数秒後には電気機関車のデッキに乗り込んで、私と並んでいた。機関士が口にするまで気がつかずにいたのだが、私は電気機関車のデッキの上にいたのだった。

振り返ると、地平線の下に沈んだ太陽から漏れてくる最後の光で、空腹のせいで機嫌の悪くなつた熊のような顔をした電気機関車と見合つことになつた。屋根の上には大きな丸いヘッドライトが乗つている。

列車は、再び坂を登り始めていた。スピードが出ず、蒸気機関車は苦しそうに大きな音を立て、煙を噴き上げている。

「キーを持ってきたか？」ロングが言った。

「うん」私はポケットに手を入れて、引っ張り出した。E BBC社の社員たちが私に持たせたのだった。

「よし、ドアを開ける」

私は鍵穴に差し込み、電気機関車のドアを開けた。

一歩入るとすぐに運転室があり、ロングはポケットから携帯用の小さなランプを取り出して、マッチをすつて火をつけた。真っ暗だった運転室が、オレンジ色の光で照らし出された。壁は明るい灰色に塗装してあつた。大きな窓が前方を向いて開いていて、そばには運転席がある。もちろん今は誰も座っていない。

運転席の背後には、機械室へ通じるドアがあつた。これには鍵はないので、ロングが開け、中に姿を消した。私もついていった。

叔父と一緒にいた間に、私も電気機関車のことを少しあは知るようになっていた。機械室の中の様子も頭に入っていた。だがこのとき、ロングの持つランプに照らされた機械室内部の風景は、それとはまったく違っていたのだ。

見覚えのある電気機器など影もなく、見たこともない機械が部屋の中央に座つていたのだ。動物園にいる象の一倍ぐらいの大きさがあり、中央に太い軸が見えていて、いびつなカボチャのような形のボディーの表面には金属のパイプが何十本もヘビの大群のようにまとわりつき、走り回っていた。

口をぽかんと開けたまま、私は長い間突つ立っていた。

「やつぱぱつこあつたか」とロングがつぶやくのが聞こえた。振り返つて私をちらりと見て、うれしそうな顔をした。

「これは何なの？」

「蒸気タービンといつ船のエンジンだ。イギリス海軍の自慢の最新技術さ。そのわりに造船所の警備はおそれまで、簡単に盗み出されちまつたが」

「叔父さんは泥棒の一昧だったの？」

「まあ、そういうことだな」

身体の力が抜けて、私は床の上に座り込んでしまいそうな気がした。ロングが気づいて腕をつかみ、運転台まで連れてってくれた。私を機関士のイスに座らせた。

「世の中いろいろあらあな」ロングは窓を開け、ポケットから取り出したタバコに火をつけた。

列車が止まったのは、二十分ぐらいのことだった。ブレーキの音が聞こえ始めたので窓の外を見ると、いつの間にか港に着いていたのだ。埠頭のどこかのようで、黒く塗られた貨物船の横腹がすぐ隣に見えていた。

ロングが窓から顔を出し、大きく笛を鳴らすのが見えた。真っ暗な中に、ピュッと鋭い音が響いた。外から足音が近づいてきて、入口のドアががちゃりと開いた。ロングがランプをかざすと、その光の中に、見たことのない男の顔が浮かび上がった。

「「Jちだよ、兄貴」ロングの声が聞こえた。

兄貴と呼ばれたのは、タワシのよつて濃いヒゲを鼻の下に生やした男だった。髪をきちんと短くかり、いかにも育ちがよさそうだが、青い目で冷ややかに車内を見回した。

「これが例の小娘だ」ロングが私を指さした。次に兄を指さした。

「これはオレの兄、ウィルソン海軍少佐殿さ

「Jの娘も賊の一味ではないのか?」^{ぞく} ウィルソンは、いかにも気に食わない顔で私を見た。

「違つたら」

「ふん」 ウィルソンは鼻を鳴らした。「で、例のものはどうにある?」

ロングは、黙つて機械室へ通じるドアを開けた。ウィルソンはランプを受け取り、弟をじろりと見つめ返し、何も言わずにドカドカ通り抜けていった。だが何秒もしないうちに、ウィルソンはそこから飛び出してきた。明らかに興奮して、顔を赤くしている。

「信じられん。なんてことだ」

「オレのJは正しかつたろ」ロングがうれしそうに叫んだ。

ウィルソンは弟を眺めた。髪はぼさぼさで、無精ひげがあつて、よりよれのシャツを着て、ズボンにはしみのある姿だ。靴など、最後に磨いたのがいつなのか、悪魔しか知らないだろう。

「おまえこそ賊の一味じやなきやいいのだがな」

「ちつとは感謝してほしいね。見つからなかつたら大事になるところだつたんだろ?」

「感謝だと?」 ウィルソンはまゆを上げた。すました顔をして、私に向けて片手を差し出した。につこり笑つて、私と握手をした。「ご協力に感謝します。何とお礼を申してよいやらわかりません。我々は、もう一ヶ月以上もあれの行方を捜しておつたのです」

ロングは口をぽかんと開けていた。「見つけたのはオレだぜ。フィッシュは座つてただけだ」

「だが、このレディの協力がなければ発見できなかつたはずだ。我々の感謝は彼女にさわげられるべきだ」

「けつ」 ロングが大きく鼻を鳴らすのが聞こえた。

私たちは運転台から出て、地面に降りた。急なステップを降りるとき、先に降りたウィルソンが、振り返つて私の手を取つて助けてくれた。貴婦人になつたような気がして、鼻が高かつた。

電気機関車のまわりは、いつの間にか水兵たちによつて取り囲まれていた。みんな銃を持ち、緊張した表情をしている。

少し離れたところに手回しよく辻馬車が待機していて、ロングが合図をして呼び寄せた。ドアを開けてもらつて乗り込みながら、私は言った。

「叔父さんのポケットに入つていたのは、蒸気タービンの部品だつ

たのね「

続いて自分も乗り込んできながら、ロングはうなずいた。
「タービンブレードといつ最も重要な部品だった。それを見せられて英國海軍が大騒ぎをして、だが秘密を要する仕事でもあるから、オレのところへお鉢はちが回ってきたというわけさ」

馬車が動き始めた。ロングがタバコに火をつけたので、煙が私のところへも派手に流れてきたが、今回だけは迷惑そうな顔はしないことにした。これはこれで一つの手柄には違いないのだから。

「叔父さんとは、なぜ殺されたの？」

ロングはタバコの煙を深く吸い、ゆっくりと長く吐き出した。ポケットに手を入れた。

「これを見な

ロングがポケットから取り出したのは、以前私が渡した紙切れだつた。白い紙に『12・ビール・ボトル』と書かれている。

「その意味がわかったの？」

「おまえの叔父のイニシャルは、間違いなくY・A・だよな

「ええ」私はうなずいた。

「じゃあ、これも見な」ポケットに手を入れ、ロングは別の何かを取り出した。

受け取って眺めたが、新聞の切抜きだった。くしゃくしゃになつ

て、ケチヤップのしみもついていたが、広げると広告欄だった。日付は、叔父が殺される数日前になつてゐる。一行広告といつやつで、企業や商店が出る大きなものではなく、一行か二行を個人が借り切る小規模なものだつた。料金も安く、求人や人探しなどに利用されていた。ロングはある行を指さした。

『釣りざおを売りたし。著名な一級品なり。北風ホテル氣付、＼＼・
A.』

「叔父さんが出した広告なの?」私は顔を上げた。

ロングはうなずいた。

「あれは新聞社の住所だつた。『ビールびん通り12番地』という意味さ。行つてみると『偉大なるロンドン市民』紙の編集部があり、古新聞の山をあさつて、この広告を見つけたというわけさ」

「叔父さんは釣りざおなんか持つていなかつたわ」

ロングは鼻で笑つた。

「『偉大なるロンドン市民』紙はまともな新聞じやない。ロンドン裏社会の情報紙みたいなものだ。ちよつと事情に詳しいものなら誰でも知つていることさ。載つている広告の大部分は、本当の意味をカモフラージュしてある。

隠語というのがあつてな。『釣りざお』とは盗品の宝石のことだ。おまえの叔父は蒸氣タービンを盗むだけでなく、盗品を売りさばく目的も兼ねてロンドンへきていたのさ。まったく大した男だよ。だがそんなやばい仕事だぜ。荒っぽい連中に出くわして、宝石だけじ

やなく今まで取られてしまったとしても、何の不思議もなかひつよ

加奈に続いて叔父までが死んでしまつと、青野家の血を引いているのは秋子という女一人になつた。

この女は独身で、大きな屋敷をもてあまし、急に心細くなつてしまつたらしい。私はそれまで女学校の寮に入れられていたのだが、そこを出て、青野家の屋敷から毎日通学するようになつた。一家の一員とはまだ言えないが、とうとう屋根の下までもぐりこんだわけだった。

ある日、女学校から帰つてくると、メイドがほつとした顔で私を迎えて、すぐに言った。

「お客さまがみえていますよ」

メイドは中年の婦人だったが、私が帰つてくるまでいかにも不安で、心細く感じていた様子だった。

「私に？」

「欧洲からいらした方のようですよ。私は外国語は知らないし、この人も片言なのでよくわからなかつたのですが、冬子さんがロンドンへいらっしゃったときの知人と言つてゐるようでした」

「ふうん」

帽子とコートを脱ぎ、彼女に預けて私は廊下を歩き始めた。奥の客間へ向かつたのだ。ここは本当に大きな屋敷で、部屋がいくつもあって廊下も長く、すべてがぴかぴかに磨かれていた。

青野家は江戸時代から続く家で、特に明治に入つてからは、生糸の売買で富をきずいてきた。その商売も先代が死去したときに閉じてしまつていだが、今でも金持ちであることに変わりはない。

客というのは白人の男だつた。すべての柱をうるしで塗り、きらきら光る貝殻細工かいがらせこくで要所要所をかざり、青い畳を敷きつめた中で座布団に座つて、あぐらをかいていたらしいが、私の足音が聞こえてきたので、あわてて正座せきざしなおしたという感じだつた。こげ茶色の背広を着て、いかにも窮屈きゆうくつそうにしてゐる。私はふすまを開けて、部屋の中へ入つていつた。

大きな身体を座布団の上にはみ出させて、ロングが正座をしてこちらを見上げているところというのは、飼い主に散々しかられて、しょんぼりしてしまつた犬を思わせるところがあつて、私は思わず笑い出しそうになつた。あわてて口を押さえたが、少し声を立ててしまつた。ロングはそれに気づき、不愉快そうな顔をして、鼻にしわを寄せた。

だが本当に、それは噴き出してしまつて、そんな眺めだつたのだ。色黒の雄牛が洋服を着て、所在なさげにちんまりと座つてゐる。自分でもそのことに気づいたのだろうが、ロングがにやりと笑つた。

「驚かしちまつたか？」

「そうでもないわ」

ふすまが開く音が聞こえたので振り返ると、メイドがひどく遠慮そうな顔つきで、私のための茶を持って入つてきたところだつた。

「伯母様がお帰りになつたら、すぐにここへお通ししてね」私はメ

イドに言つた。血縁はなかつたが、秋子のことを探して私は伯母と呼んでいた。

「はい、お嬢様」

「こんなところで何をやつているの?」メイドが出ていったあと、自分で座布団を出して座つて、私は言った。

「オレだって来たくはなかつたさ。つまらねえ仕事さね」ロングはふてくされた顔をした。「頼みたいことがあるから来たのさ。おまえにじやなく、伯母上にだがな」

「へえ」

「だが通訳が要る。伯母上は英語は話すまい?」

「そうね」

部屋の外から足音が聞こえてきたのは、そのときだつた。ふすまの向こうから、伯母とメイドが話す声も低く聞こえた。

すぐにふすまが開き、伯母が姿を見せた。いつもと同じように海軍の制服姿だ。ほとんど黒といつてよいような紺色の上着とズボンだ。女の職業軍人というのはこの時代には珍しかつたし、士官だともつと珍しかつた。中佐となると、海軍でも彼女一人だけだつたと思う。

伯母の姿を見て、ロングがため息のような声を上げたのを私は聞き逃さなかつた。はじめて伯母に会う人は、例外なくこのような反応をした。伯母は帽子を脱ぎ、わきの下にはさんでいたので、つや

のある黒い髪が見えた。髪先は後ろでたばねて、きちんとまとめてある。

「どうかそのまま」「ロングはあわてて立ち上がりうとしたが、伯母は軽く手を上げて制した。

「青野です」背筋を伸ばし、帽子をかぶりなおし、伯母は正式な敬礼をした。ロングは照れたように笑って、あやふやでいい加減な敬礼を返していた。

居心地が悪そうに、ロングは座り直した。伯母も座った。メイドが茶をもう一つ持ってきて、伯母の前に置いた。メイドが出ていくと、ロングが話はじめた。私は通訳をした。

「オレたちには、どうしてもあなたの協力が必要なんだ。青野中佐」「

伯母は何も言わずにロングを見つめていた。ロングが続けた。

「英國政府は、昨日横須賀に入港したある船に強い関心を持つている」

伯母がため息をつくのが聞こえた。「正確には、あの船の積み荷に関心があるわけですね」

「ああ

「よくいじ存じですね」伯母は身体の力が抜けてしまった様子だった。今までそんなところは見たこともなかつたので、私は少し驚いていた。伯母は続けた。「でも、なぜあなたが日本に来ているのです? もう海軍は退役なさつたのでしょうか?」

ロングは少し首をかしげて、唇をゆがめた。

「オレだって、好きで極東くだりまで来たわけじゃねえさ。親父に勘当されそうになつてさ。兄貴がとりなしてくれるというんだが、交換条件としてこれが出てきた。この件を首尾よく解決することができれば、オレは遺産相続人にどざまることができる」

「大変ですね」

「まあな」

「それって、どういう積荷なの？」我慢できなくなつて、私は横から口をはさんでしまつた。日本語のわからないロングは不思議そうな顔をした。

「蒸気タービンですよ」伯母が小さな声で答えた。

「え？」

『タービン』という言葉が聞き取れたらしい。ロングが言った。
「日本海軍もなかなかの策士だわな。詳細は話せねえが、今度こそ密輸に成功したわけだ。それが昨日、横須賀港に到着したということさ」

伯母はもう一度ため息をついた。「高性能の船を作るには、どうしても必要なのです。それあなたは、何を知りたいのですか？」

ロングの表情がけわしくなつた。

「港に陸揚げした後の輸送方法が知りたい。なんとか穩便に取り返したいのでな」

「でもこの密輸には、私はまったく関わっていないのですよ。それにそもそも、どうしてあなたに協力しなくてはならないのです？」

伯母はロングをまっすぐに見つめていた。英国人であるうが誰であろうが、必要があれば戦い、殺すこともいとわない戦士のような視線だと私は思った。言葉づかいはやわらかくても、やはり伯母の内部には、ああいうだけだけしい女が潜んでいたのだ。

だがロングも大したもので、伯母を見つめかえして手招きをし、座布団の上で身体を乗り出させた。伯母の耳に顔を近づけ、ロングの口が動くのが見えて、何かをささやいたようだつた。

何を言つたのか、私には聞こえなかつた。何語だったのかもわからない。だがロングでも短い日本語なら覚えることができるだらうし、伯母も英語が一言もわからないわけではない。

ロングの口が閉じ、耳もとから離れていつたときには、もう伯母は真っ青になつていった。息もできないでいる様子だ。ロングを見つめ返し、「本気ですか?」と言つた。

ロングは無表情にうなずいた。

「なんてこと」という伯母の小さな独り言が聞こえてきた。

伯母はため息をついた。「そういうことであれば、私は協力するほかありません。何ができるかわかりませんが、努力はしましょう」「そうしてくれると助かるよ」ロングは答えた。

ロングはすぐに帰つていった。私は玄関まで見送つたが、伯母は

部屋にこもつたまま、顔も見せなかつた。屋敷の近所には外国船員向けのホテルがあつて、自分はそこに滞在しているだけ言つて、ロングは姿を消した。

数日後、私が学校から帰つてくると、珍しくももつ伯母は帰宅していた。私を部屋へ呼び、ロングへ伝えるべき伝言を私に持たせた。約束の時間が迫つていたので、私はすぐに出かけた。

ロングは毎日夕方、同じ時刻に近所の公園を散歩することになつてゐた。だからその時刻に公園へ行けば、誰にも怪しまれずにロングと顔を合わせることができた。この町は港にも近く、外国人の姿も珍しくはなかつた。

公園は、長い坂道を登つていつた先にあつた。何ヘクターもある大きな公園で、家族連れが散歩したり、カツップルがデートをしたりする場所だつたが、寒い日だつたから、このときは誰もいなかつた。私は駆けていき、公園の中へ入つていつた。

ロングはすぐに見つかった。公園の中央に池があり、そこで水鳥を眺めていた。ロングもすぐに気づいて、私に近寄つてきた。コートのポケットに手を突つ込み、身体を左右に大きく傾けながら、いかにも暇をもてあましているという風情だ。私から数メートルのところまで来て、ベンチにドスンと腰かけた。私に背中を向けたまま、話しかけてきた。

「イギリスの冬は寒くて好かんが、日本の冬も女神の微笑みのようとは言えんな」

「蒸気タービンの件なの」私はささやきかけた。ロングとは違う方向を向き、空を眺めているふりをした。

「余計なことはいい。要点だけ言え」タバコを吸いすぎてでもいるのか、ロングの声はひどくガラガラして、聞き取りにくかった。機嫌も悪そうだった。

自分の顔だからもちろん見えなかつたが、私は唇をゆがめていたかもしれない。「9884号」という貨車に積まれて、貨物列車で運び出される予定なの。積み込む日付まではわからない。だけど、四月一日以降になるのは確実だらうって

「それだけか?」

「ええ、ご不満?」

「そんなことはねえ。それだけで十分さ」

私はくるりときびすを返し、公園から出てきた。ロングはその後もベンチにとどまっていたのかもしれないが、ふり向かなかつたので私にはわからない。

ロングに会うことにはもう一度とないだらうと私は思つていた。すぐに屋敷に戻つて、ロングには伝えたと伯母に伝えたが、それ以後は伯母も私も、ロングや蒸気タービンのことを話題にすることはなかつた。本当の話、私はもうロングの顔など見たいとも思わなかつた。だが、望みなどかなわないのが人の世の常なのだらう。その数日後のことだ。

学校を終え、私は家へ帰るうとしていた。駅のプラットホームで

列車を待っていた。目の前の線路を貨物列車が発車しようとしていることには気づいていたが、特に関心などなかつた。黒く塗られた何十両かの貨物車の列に過ぎない。の中に何が積まれていようと、私の知ったことではない。

ところがその私の目の前に、不意にロングが現れたのだ。

ロングも同じプラスチックホームにいたらしかつたが、私は気づいてはいなかつた。あちらは気がついていたらしい。私めがけて駆けてきて、貨物列車を指さし、大きな声で言つたのだ。

「おいつイッシュ、あれは一体どういうことだ？」

私には意味がわからなかつた。「なんなの？」

「あの貨車には9884と書いてあるんじゃないかな？」

私は貨物列車を見た。そして気がついた。どうとこいつとのない普通の四角い貨車だつた。他の貨車と同じように真っ黒に塗られているが、車体の横の部分には、たしかに白いペンキで9884と書いてある。

「まだ四月にはなつていないわ」

だが私の言葉は、ロングの耳には入らなかつたかもしれない。ひびくやしきうな声を出した。

「あれは横須賀から来た列車だ。やつらめ、予定を早めやがつたんだ

貨物列車は、もう駆け足ぐらゝにまで加速して、駅を離れていき

つつあつた。長い列車で、9884号貨車は前から三分の一ぐらいの場所に連結されている。先頭にいる機関車は信号機を越えて、もう本線に乗り出している。だが私には、どうでもよことと思えた。

「まあ、がんばってよ」

だがロングは答えなかつた。不意に私の手首をつかみ、強く引いたのだ。私は引きずり倒されてしまいそうになつた。あわてて足を踏ん張つてバランスを取り戻したが、すぐにまた引きずられて、ロングと一緒にプラットホームの上を走り始めることになつた。

「何をするの?」

「ついて来い。通訳が要るかもしけねえ」

それが、ロングがしてくれた唯一の説明だつた。だから一分後には、私は家とは反対方向へ向かう列車の中にいた。その列車がちょうど発車するところだつたのだ。動き出しかけた列車のドアを開け、ロングは私を押し込んだ。すぐに自分も飛び乗つてきた。

「人さらい!」ロングの手を振り解き、私はにらみつけてやつた。だが列車は、もう駅を出てしまつている。どうあっても、次の駅までは引っ張つていかれることになる。

ロングは何も言わなかつた。窓越しに外を気にしている。このあたりには四本の線路があり、北側の一本を旅客列車が、南側の一本を貨物列車が使つていた。ロングは、この列車がさつきの貨物列車に追いつくことができるかどうかを気にしていたのだろうが、私は本当にどうでもよいことだつた。

「私は次の駅で降りるわよ。邪魔をしたら車掌を呼ぶからね。警察に突き出して、イギリスへ送り返してやる」

「そうなれば」「ちらりと私の顔を見、また窓の外に視線を戻して、ロングは平気な顔で言つた。「イギリスは蒸気タービンの件を公表して、国際問題化させるだけだ。タービンが9884号貨車に積まれたことをどうやってオレがかぎつけたのか、きっと日本政府は知りたがるだろうよ」

これはもう完全に脅迫だつた。だが私にも、これには逆らひ」とはできないとすぐにわかつた。

私の表情の変化に気がついたのだろう。ロングはうれしそうに笑つた。「暇があればだが、伯母上にあてて電報を打たせてやるよ。不必要に心配させることはないからな」

もう私は何も言つ氣にならなかつた。一時間後、すっかり日が暮れてしまつていたが、私とロングはある田舎の駅で列車を降りた。谷間にある小さな駅で、短いプラットホームとちやちな建物があるだけで、駅員は一人しかいなかつた。駅前から細い道が森の中へ向かつて伸びているが、ぐるりと見回しても、家は一軒も見えなかつた。きっと山道を何百メートルか行つた先に村があるのであるのだろう。

私とロングは列車から降りて、道を歩いていくふりをして、ぐるりと大回りをして、茂みをかきわけてまた駅まで戻つてきた。あたりは真っ暗だが、ポンポンポンといる客たちや駅員から見られないように気をつけていた。線路のすぐわきに小さな小屋があつたので、その影で待つことにした。

私はそばに積んであつた丸太に腰かけたが、ロングは立つたまま、

駅の建物から差し込んでくる弱い光にかざしてときどき懐中時計を眺め、何度もまわりを見回して、誰にも見られていないか確かめていた。

九時過ぎになつて、とうとう貨物列車が姿を見せた。私たちは、何とか追い越すことに成功していたのだ。真っ暗な中、遠くからヘッドライトだけがぎらりと光っている。シユウシユウいいながら煙をはいている。ブレーキをかける音が聞こえた。スピードを落としていき、とうとう停車した。

機関車の運転台に人影が一つ見えた。機関士と機関助士だ。ここからでは声は聞こえないが、気楽そうにおしゃべりをしている。駅員もプラットホームに出てきて、そのおしゃべりに加わった。ゆつくつと歩いて、三人は駅の建物の中へ入つていった。

「いい気なものね」私は言った。

「そりやそうだろ」ロングが小さな声で答えた。「発車まで一時間もあるのだからな。この駅で、後から来る急行列車に道を譲るんだ。ほれ、もう一人お仲間が来たぞ」

車掌室から車掌も出てきて、駅の建物へ向かうのが見えた。ガラガラと戸を開けて、中へ入つていった。これで貨物列車は無人になつたわけだ。

「行くぜ」

雑草をかき分けて線路に出て、貨物列車にそつて歩いていった。貨車の黒い車体がいくつも並んでいる。足元は砂利だから歩きにくいい。

「例の貨車はどのあたりだつたつけ?」私は小さな声で言つた。

「前から三分の一ぐらゐのところだつた。もう少し歩かなきゃな」歩き続け、私たちは9884号貨車を見つけることができた。立ち止まって私が車体を見上げ始めたときには、もうロングは身体をかがめ、前後を見回していた。

「似た形の貨車は近くにないか?」ロングの声が聞こえた。

「五つぐらいころ後ろにあるのがそつくつよ」

「そいつの荷札を抜き取つてくれ」

「どうするの?」

「いいから行つてこい」

私はその貨車のところへ行き、車体の側面に貼り付けてある荷札に手を伸ばした。分厚いボール紙でできていて、金属製のホルダーに差し込んである。荷主の名と目的地が書き込んである。鉄道員たちはこれを見ながら、貨車を走らせるルートを決めるのだった。

私はその荷札を持ち、ロングのところへ戻った。その間にロングも、9884号貨車の荷札を抜き取つていた。私たちは荷札を交換し、再び貨車に取り付けた。一つの貨車の荷札が張り替えられたわけだつた。

ロングは手帳を取り出し、荷札の内容をメモはじめた。ロング

は私に、ひょいと手帳のページを見てくれた。

「駅名はこの漢字で合つてるか？」

私は田をじらした。声は出さなかつたが、かすかに笑つてしまつた。

「ものすゞへたな字だけど、読めなくはないわ」

「それはよかつた」

「それをどうするの？」

「これを伝言して、オレの仕事は終わりさ。あとは諜報部じよほうぶの連中にまかせる。」この駅に先回りして、この貨車をおさえるだらうよ」

ロングがイギリスへ帰つていつた数日後、私はどうどう決心を固めて、海軍にてて手紙を書いた。あて先は、横須賀の司令部としておいた。

伯母が所属している部署だ。だがこの手紙は、別の誰かが開封するだろう。わざと伯母あてにはしなかったのだ。差出人も匿名にしておいたが、中身は、伯母がイギリス人たちに情報を漏らし、それゆえ蒸気タービンは取り返されてしまったのだと告発する内容だった。

もちろん伯母は逮捕され、軍法会議にかけられるだらう。まず死刑はまぬがれまい。もしかしたら私まで罪に問われることになるかもしれないなかつたが、そのことは考えないことにしていた。青野家に復讐するためであれば、その程度の危険をおかすのはやむをえない。

だが私は十四歳だったのだ。海軍の連中が、本気で私の責任を追及するとは思えなかつた。きっと連中は、私は何も知らずにただ伯母の言つとおり行動したのだと解釈してくれるだろう。

登校する途中で郵便ポストに立ち寄り、私はその手紙を投函とうかんした。さつと歩き始め、駅へと急いだ。

私の学校には専任の音楽教師がいて、佐藤という女の教師だつたが、希望する生徒には個人的にピアノを教えてくれたので、私も習つていた。

週に一度、放課後私は音楽室に彼女を訪ねて、ピアノの前に座つた。だからこの日もいつものように音楽室へ向かつたのだが、胸の動悸じゅうきをおさえることができなかつた。あの手紙はもうどこまで行つたろう。そろそろ海軍に届けられるこひだらうか。

この日の私は練習に集中することができず、細かなミスをいくつも積み重ねた。自分でも嫌になつてしまつたが、佐藤は嫌な顔一つせず、何回も直してくれた。

この日の練習は、とても長く感じられた。だがそれもついに終わり、私は楽譜を持って立ち上がろうとした。

「先日は、母の葬儀に来てくれてうれしかつたわ」突然、佐藤が言った。

佐藤は独身で、ずっと母親と一緒に暮らしていた。だがその母親が一週間ほど前に亡くなり、生徒たちも集まつて、家で葬儀が行われた。彼女の家は下町にある小さな借家で、黒い瓦を乗せて、ずん

ぐつと同じ形をした家が何十軒も並んでいる中にあった。どうにも殺風景な場所だったが、彼女の家の小さな庭には木や草が植えてあり、まわりの家々よりは少しは明るい感じがした。

「はい」私は小さな声で答えた。

「あなたの顔を見ているとね」自分も楽譜をかたづけながら、佐藤が話し始めた。「あの田のことを思い出すわ。母は助産婦をしていた。家中でたくさんのお嬢ちゃんを取り上げたのよ。十数年前のことだけれど、白人とのハーフの赤ちゃんを取り上げたこともあった。とてもきれいな女の子だったわ。あなたと同じような青い目をしてね。髪も同じように金色がかっていた」

「ハーフ？」

「ええ。私には姉がいてね。そのころ姉はあるお屋敷に奉公していたのだけど、そこのお嬢さんが外国人との間に赤ちゃんを身^{ぱい}につけたね。だけど正式には結婚できない事情があって、だから姉はお嬢さんを連れて、母のところへ来たの。そして出産して、赤ちゃんは里子^{さとこ}に出されたらしいわ」

「里子？」

「私もよくは知らないのよ。母と姉が話すのを断片的に耳にしただけだから。なんでも後年、お嬢さんはお屋敷の人たちをだまして、まったく身寄りのない氣の毒な孤児だからという口実で、お金を出してどこかの女学校へ行かせてあげているということらしかったわ」

私は胸がときどきしばじめた。心臓が口から飛び出してしまって、うな気がした。まさか。しかし、どうすればそれを確かめることができ

できるだろ？ 思い違いであつてくれればいいのだが。

私は制服の胸に手を入れ、細いクサリの先につけられた小さなペンダントを取り出した。常に胸にかけているもので、小さな写真を入れて、好きなときにフタを開いて見ることができるようになっている。

本来なら恋人たちが使うものだろうが、私にはそんなものはないなかつた。驚いた顔をしている佐藤の前で私はペンダントのふたを開け、中にある写真を見せた。すぐに佐藤の表情が大きく変わつた。
「姉の写真を、どうしてあなたが持つてているの？」

さよならも言わずに、私はカバンをひつつかんで、音楽室を走り出た。列車に飛び乗つても、駅に到着するまでがとても長く感じられた。屋敷に帰つても、伯母はまだ帰宅してはいなかつたが、待つてゐる時間はなかつた。すぐに駅へ駆け戻つた。

ときどきだつたが、私は駅で伯母と出くわすことがあつた。今日も伯母は午後五時四十五分の列車に乗つて帰つてくるのではないかと私は思つてゐた。

五時四十分には、私はプラットホームに出て待つてゐた。プラットホームのはしで首を長く伸ばして、横須賀の方向を眺めていると、やつと汽車の姿が見えてきた。伯母がいつも一等車に乗つてゐることを知つていたので、茶色い車体に青い帯を引いた客車を目指して、私は駆けていった。

ギギッと音を立てて止まるのももどかしく、私はドアに近寄つた。一等車の出入口は一つあつた。どちらから降りてくるのかわからぬので、私はきょろきょろした。向こうのドアのところに海軍の制

服が見えた。私は駆けていった。

足音に気づいて伯母は顔を上げ、驚いたような顔をした。振り返って、おつきの若い当番兵からカバンを受け取りながらだつたが、「どうしたの？」と言つた。

汽笛が聞こえ、汽車が動き始めた。伯母は軽く手を上げて私の口を閉じさせ、再び振り返つて、当番兵に向かつて敬礼をした。デッキに立つたまま、当番兵も敬礼を返した。指先にまで力を込め、一瞬でピーンと石像のように硬くなつた。

汽車が行つてしまつと、プラットホームの上は急にひとけがなくなり、ひつそりとしてしまつた。涙が出てきそうな気がしたが、なんとか我慢することができた。私は早口に言つた。

「伯母さんは、本当は私のお母さんなのね」

「何を言って出すのです？」伯母は微笑もつとした。

「佐藤先生から聞いたの。佐藤先生は、ロンドンでしばり首になつた佐藤の妹だったの」

私は、音楽室で聞かされたことを話し始めた。伯母は黙つて聞いていたが、話し終えたとき、ほおをそつとなでてくれた。

「おまえはときどき、お父さんとそつくりな表情をすることがあるのですよ」

私には、まだ話さなくてはならないことがあった。私は、今朝投函した手紙のことを話し始めた。見る見るうちに、伯母の顔は紙のようになつてこつた。

「それは本当のことなのですね?」最後に伯母は言った。

「ええ」

伯母は目を閉じ、私の肩に軽く手を置いた。何かを考えているようだつたが、とうとう目を開いた。

「冬子、よく聞きなさい」

「はい」顔を上げ、私は伯母をまっすぐに見つめた。

私と伯母はすぐに別れた。伯母は次の汽車に乗つて横須賀へ引き返したが、私は下り列車に乗つて、西へ向かうことになった。

すっかり日が暮れてしまつていたが、普通列車に乗り、走り続けた。途中の大きな駅で何分間か停車したとき、プラットホームに降りて時刻表を買つてきた。

列車がまた動き出し、私は時刻表を調べ始めた。車内はすいていたが、嫌な感じがなかつたわけではない。少し前から気がついていたのだが、デッキに若い男が一人、ずっと立つたままでいるのだ。空いているイスはいくらでもあるのに、なぜか座らないのだ。

目のみで観察していたのだが、気づかれないようにしているつもりなのだろうが、男は何度もちらちらと私に視線を向けていた。私を尾行するように命じられているのだろうが、うまいやり方ではないとえた。いくら海軍の学校でも、尾行のやり方までは教えないのだろう。

夜行列車だつたから、夜が明けてもまだ走り続けていた。すべての駅に停車しながら、ひどくゆっくりとだつたが、もう古屋はすぎ、岐阜県に入つていた。

あの男は、私の居場所をどうやって上司に連絡しているのだろうと思った。車掌や駅員が便宜を图り、電報を打つてやつているのだろうか。

だが、それはありそうもない気がした。新聞ざたになつた後はと

もかく、今はまだこの事件は極秘扱いだらう。すると、私がこの列車に乗つていることは、この世での男一人しか知らないということになる。

朝早く、列車が^{せき}関^{せき}原^{はら}をすぎたばかりのころだつたが、私は突然立ち上がり、ある駅で下車した。名前も知らないし、急行列車も止まらないような小さな駅だつたのだが、駅前に広がつている町も同じように小さかつた。旅館が一つと食堂が一つ。少し向こうに小さな酒屋が見えている。

駅を出てもきよみきよろなどせず、いかにもよく知つた町であるかのようだ、私はすたすたと歩き始めた。

街道を外れていたから江戸時代にも大して繁栄はせず、今になつても小さな駅が一つあるきりというしみつたれた町だつたが、少しだけ馬車屋があるのが目についた。小さな建物の扉が半分開いていて、小型の馬車が一台、お尻を見せてている。

のぞきこむと男がいて、わらたばで馬の背中をなでてやつていたが、話しかけるとすぐに用意をしてくれた。赤ら顔で、いかにも酒をよくやるという感じの中年男で、馬をつなぎ、馬車を通りに引き出して、私のためにドアを開けてくれた。

「どこまで行きますか？」見慣れない制服姿に不審そうな顔をしているようだつたが、御者は言つた。

「東谷までお願いします」駅前の案内図を見て、適当に覚えておいた地名だった。ここから一キロばかりある。

「はい」

馬車は走り始めた。田舎道だから石畳などなく、せじわじドアントを揺れる。もう大丈夫だろうと思える距離まで来て、私はちらりと振り返ったのだが、あの男はまだ駅前に立つて、こちらを見ていた。

「ねえ御者さん」窓から身体を乗り出して、私は話しかけた。「この町には、他には馬車はないのかしら？」

「どうどう」「御者は馬に声をかけて、歩調を少しゆるめさせ、たゞなをピシッと鳴らして答えた。「へえ、この馬車が一ひとつある通りですか？」

「隣町には？」

「ある」とせあつますが、何キロも先ですよ。どうかなすつたんですか？」

「こんど十人ばかりの集まりがあつて、馬車を借りようかと思つたけど、この馬車一台では運びきれないわね」

「そういうことなら、あつしが手配できますよ。そのときにはおっしゃつて下さいまし」

「ええ、ありがと」

窓から顔を引っ込め、私はゆつたりとイスに座りなおした。思わず微笑が浮かぶのをおさえれ」とができなかつた。あの尾行者には、私のあとを追う方法はない。

「御者さん」馬車が町を完全に抜け出たとき、私は再び話しかけた。

「さ」

「急に用事を思って出したの。東谷はやめにして、長浜へ行つてくれ
るのかしら？」

「へえ、みんなついぞこまか」

長浜は駅のある町だつた。だがやつせりはまつたべ別の路線だか
い、まあかあの男も気がつかないだろ？

馬車は田や畠の間を走り続けた。平野を抜け、山の中へ入つてい
つた。道がくねくね曲がつて、上り坂になる。窓の外も、木や草の
しげみになる。とぎとき崖のそばを通る。たまに川があつて、短い
橋を渡る。一時間ほど走つて田的に着いた。駅の前で、御者は馬
車を止めた。

「へえ、着きました

「ありがとう」

ドアを開けて馬車から降り、私はサイフを取り出して料金を払つ
た。御者を見つめ、にっこりして、もう一枚余分に紙幣を渡した。

「これか？」「御者はひどく驚いた顔をした。

「帰つに一杯やつてくださいな」

「ひとつやあ、どうもすみません」

御者が馬車に乗り込み、ムチを振るつてビンがへ見えなくなるの

を待つてから、私は駅の中へ入つていった。

改札口でキップを買いながら、私は満足していた。あの御者は、いかにも酒好きな感じのする男だった。きっと今ごろは、どこかの店で一本つけ始めているだろう。車庫へ帰るのは何時よりも先のことには違いない。私をどこまで乗せたのかを尾行者が知るのは、その後のことだ。

次の列車をつかまえ、私はさらに西へ進んでいった。

日が暮れる少し前には、私は神戸の町に入っていた。すぐに町の詳しい地図を買い、少し洋服も買って着替えた。

港のそばの小さな旅館に宿を取り、二日間待つた。その日がやつてきて、私は宿を引き払い、歩き始めた。

伯母とは、港のある地点で待ち合わせていた。そこから近いといふことで宿を選んだのだが、地図で見ても、歩いて三十分かからずに行き着くことができそうに思えた。だが私の考えは甘かったようだ。

私が歩き始めたのは、夕方五時ごろのことだった。伯母とは六時ちょうどに待ち合わせていた。だが不意に、私は前方にいる人影に気づいたのだ。

薄暗くて見えにくかつたが、私はとっさに物陰に隠れた。首を伸ばして、見つからないようにそつとのぞき込んだ。ここからは五十メートルぐらい先だ。通りの中央に男ばかりが数人いて、いかにもぬけ目のない感じで、見回しながら立っているのだ。

背筋がぴんと伸びていて、どう見ても港の作業員という感じではない。私はため息をついた。私を見失つても、先回りする知恵は彼らにもあつたわけだ。

地図を取り出して眺めたが、男たちがいるのは埠頭ふとうのちょうど根元に当たる場所で、そこを通らないと約束の場所へ行くことはできなかつた。何か方法を考えなくてはならなかつた。私はきびすを返し、そつと町のほうへ戻り始めた。

私はまわりを見回した。港と市街の間に広がつてゐる地帶だ。工場と一般の住宅が、「ゴチャゴチャに混ざつて建つてゐる。それらのむこうには、造船所の大きなクレーンがいくつか立つてゐるのがシルエットで見えている。」こういふ場合、ロングならどうやって切り抜けるだらうと私は考え始めた。

私は立ち止まり、自分の身体を見回した。なんといふことのない服装だ。白いブラウスの上に黒い上着を着、ズック靴と白いズボンを身につけてゐる。動きやすさだけで選んだ服装だ。手に持つているカバンは大きくふくらんでゐるが、入つてゐるのは学校の制服だけだ。このズボンの上に制服を着たら、看護婦のようになれるだろうかと私は考え始めた。

しかし、いつまで考えていても始まらなかつた。私は上着を脱ぎ、ブラウスとズボンの上から制服を身につけた。真つ白なワンピースだから、校章をはずしてしまつと、看護婦に見えなくもないと期待するしかなかつた。それにもうすぐ真つ暗になる。思いついて、白いハンカチを頭に巻いて、看護婦の帽子のようになることにした。

まわりを見回し、そばのドブに古いバケツが落ちてゐるのを見つけた。靴と指先をぬらして拾い上げ、何回かすすいで泥を落とした。

ひどくさび付いているが、穴は開いていないようだつた。

それを手に持ち、私は歩いていった。老人に出会ったのは、その後のことだつた。

七十歳は軽くすぎているような男で、しわだらけの顔をして、背中が前のめりにきつく曲がっている。大きなガラスびんを手にもち、戸をがらがらと開けて道路に出てきたところだつた。ビンの中には白い液体が入つてゐる。歩いていく方向から見て、ビンの中身をドブに捨てようとしているようだ。

「おじいさん、何をしているの？」

まだ耳は遠くないようで、私が話しかけると、老人は驚いたように顔を上げた。

「何かね？」

「その牛乳をどうするの？」私はもつ、ビンの中身は牛乳だらつと見当をつけっていた。

「腐らせてしまつたのでな。捨てるのじやよ」歯のぬけた歯ぐきを見せて、老人はにつと笑つた。

「ちよつとよかつたわ」私は微笑みかけた。「私に下さらないかしら？」

「何にするんだね？」老人はビンを高く持ち上げ、私にを見せた。「腐つておるんじゃよ」

「私は猫を飼つてゐただけだ。名前はブラック大魔王といふの。

でも変な猫でね。腐つた牛乳しか飲んでくれないのよ

「ど！」にそんな猫があるもんかね

「それがいるのだから困つたものよ。ほびよく腐つた牛乳をやらないと、ご機嫌が悪いの。私は引っかかれてしまつのよ

「それはまあ、捨てるものじゃから、差し上げてもかまわんが」

「じゃあお願ひ」

私はバケツを差し出した。老人はまだ不審そうな顔をしていたが、ビンの中身をバケツにあけてくれた。とたんに、目が痛くなるような匂いが襲いかかってきた。少なくとも数日は忘れられていたものらしい。ところどころ練り歯磨き^{ねはみが}のように固くなっている。

「本当にこれでいいのかね？」老人は疑わしそうに私を見た。

「ええ。これでブラック様の『満足は疑いなしだわ』

老人がまた何か言い出す前に、私はさっさと歩き始めた。匂いが強いので、バケツはできるだけ身体から離して持つことにした。すぐにつきの場所まで戻つてきた。

もちろん男たちはまだいた。私はハンカチをもう一枚取り出し、顔の前にマスクのようにかぶつた。目だけはどうしても出すことになるが、暗い中で瞳の色に気づかないでいてくれることを祈るしかなかつた。

奇妙な姿で私が近づいてくる」とこま、彼らはもちろん何十メー

トルも前から気づいていた。五人いて全員が私服姿だが、それでもいかにも軍人ふうな感じがする。

「止まれ」近くまで行くと、すぐに話しかけてきた。私は言われたとおりにした。

「ど」「へ行く？ それはなんだ？」背の高い男が言った。

「消毒薬よ」私は答えた。

「消毒薬？」別の一人がかがんで、バケツに顔を近づけた。とたんに声を上げて、数歩逃げた。「ひどい匂いだな」

「良薬は口に苦じつてこつわよ

「その消毒薬をどうする気だ？」

「この先に運河があつて」私は軽く指さした。「水がよどんだ場所だから、ボウフラが大量に発生していると通報があったの。だから保健所から持つてきたのよ」

「おまえは保健所の人間か？ なぜ看護婦の服を着ている？」

「これは保健所の制服よ。わからない？」

「制服のある保健所など聞いたこともないな」男たちは不審な顔をした。「身分を証明できるものを持つているか？」

自分でも驚いたが、私は声を震わせることさえなかつた。「職場に置いてきたわ。あなただったら、ボウフラ退治に出るのにそういう

うものを持つてくる?」「不審なら、問い合わせてもいいわよ」

「しかし保健所が、なぜこんな夕方に仕事をする? 明日ではいかんのか?」

「明日でもいいわよ。だけど夜のうちにボウフラがかえって、明日あたり大量の力が発生するわ。体中食われても知らないわよ」

「保健所に問い合わせをする。少し待て」

「まあまあ」別の人人が言った。「匂いがかなわん。行かせてやろうじゃないか。鼻が曲がつてしまいそうだ」

私は通ることを許された。バケツをかかえ、歩き続けた。男たちからは見えないとこままで行き、牛乳はバケツごと海に捨て、せいせいして深呼吸をした。制服を脱ぎ、黒い上着を着て、埠頭の先めざして歩いていった。

伯母とはすぐに出会いことができた。大きな木箱の影に隠れていだが、足音を聞きつけて姿を見せたのだ。

「遅かったのね。心配していたのよ」伯母は、すぐに私を連れて歩き始めた。

「埠頭の入口に見張りがいて、少しおじ居をしなくてはならなかつたの」

「そりなの。でも来れてよかつたわ」

伯母は私を、岸壁につないである小さなボートのところへ連れていった。波を受けて、ゆつくりと揺れている。

「乗りなさい」

私は言われた通りにした。伯母も乗り込んできて、すぐにロープをほどいた。伯母はオールをこぎ始めた。

船べりにつかまつたまま、私は神戸の町を眺めていた。もう真っ暗で、市街の明かりが黒い山を背景にして浮かび上がっている。空では星が光り始めている。

「冬子、これを腕にはめていなさい」

伯母はポケットに手を入れて、何かを取り出した。手渡されてわかつたのだが、銀色に光る本物の手錠だった。

「どうして？」

「すぐにおはめ」オールをこぎ続けているせいで、伯母は息を切らせはじめている。少しの間迷つたが、言われたとおりにすることにした。ここまで来てしまっては、逆らつても仕方がない。

「もうすぐ船に着きます」何度も後ろを振り返りながら、伯母が言った。すでにボートは陸地を何百メートルも離れてしまつていて、行く手には黒々とした船のシルエットが浮かび上がり始めていた。イカリを下ろしているのも見える。暗すぎて細かい部分までは見えないが、軍艦のように思えた。

ボートはその船に近づいていった。確かに軍艦ではあるが、戦艦と呼べるほど大きな船ではないようだった。へたきの形がナイフの

よつエスマートだから、スピードは出ないだ。

甲板からは鉄の階段のようなものが下ろされていて、伯母はそれにポートをつけた。水兵が待ち構えていて、ポートのロープを取り、階段にゆわえつけた。

「中佐殿、お一人で大丈夫でしたか？」

男がもう一人いて、伯母に向かつて、きりっと敬礼をした。あとでわかつたことだが、この船の副長だった。オールから手を離し、伯母も敬礼を返した。

「大丈夫だ。手錠をかけてある」

「（一）苦労様です」

「鈴木のことは残念だな」伯母は立ち上がり、手すりをつかんで、鉄の階段にひょいと乗り移った。

「鬼のカクランといひやつでしょう。すぐに退院できることでした」

「そうだな。殺しても死ぬようなやつじゃない」

「はい、中佐殿」

「乗組員たちは、私が臨時の艦長になることを知っているのか？」

副長はうれしそうに笑った。「みな楽しみにしております

「私はきつこ女だぞ」

「なんといいますか、お手並み拝見といつ氣分なのだらうと思います」

「そうか」

「歓迎いたします」

伯母は私を無表情に振り返った。「この娘を船室へ入れておけ」

副長は田を丸くした。

「これが国外追放にする例のロシア娘ですか？ 急な話なのでとまどいましたよ。船の準備が間に合つかどうか、いささか汗をかきました。せめて一日余裕を見て連絡をくれればいいものを」

「外交官どもは身勝手で、自分たちの都合しか考えない。実際に手足となつて働く我々のことなど気にもしてくれないさ」

「まったくですな」

「この娘を入れるのに適当な部屋はあるか？」

「それが」副長は少し困った顔をした。「予備の食料庫を片付けさせて、そこにほうり込んでおこつかと思います」

「そこから出たものはどうに置く？」

「床に転がしておくしかないでしょ？」

「それでは歩くのに邪魔だ。艦長室は空いているのだらうへ」

「中佐殿がお使いになるのでは？」

「私は使わぬ。その娘は艦長室へ入れておけ。窓をふたさげ、外から力ギをかける」

「承知しました」

副長は、ボートから降りるよつにと私に合図を送つてきた。こわごわ立ち上がり、私はゆっくりと乗り移つた。

「手錠は外してやれ。海の上から逃げ出せるやつはあるまい？」伯母は、副長にひょいとキーを投げた。

私は艦長室に入れられた。鉄の壁で囲まれて、小さな窓が一つあるだけの四角い部屋だが、その窓も今は戸戸のようなものでふさがれている。ちやちなベッドと机があるだけで、他には何も置けないぐらいせまい。私はベッドに腰かけた。船が動き始めたようだつた。エンジンの音が大きくなり、船体が揺れ始めた。

船は走り続け、私が艦長室から出されたのは四十八時間後のことだった。外から力ギが開けられ、ドアが開きはじめると、伯母が誰かと話している声が聞こえてきた。

「まあ、そういうことだ

私は緊張し、立ち上がった。伯母が入ってきた。背後に副長や水兵たちがいるのも見えた。

「外へ出てもうおひ。迎えの船が来たぞ」伯母が言った。

私は男たちを見回した。ひどく怖かった。すくんでしまったようになつて、足をのろのろと動かすことしかできなかつた。

「早くしろ、のろのろするな」

伯母が私の肩を突き飛ばした。私は床に倒れてしまつた。

「そつまでなさらなくとも」副長が手を取つて、起こしてくれた。

「ふん」伯母は鼻を鳴らした。

私は甲板の上へ連れていかれた。外は真つ暗だつた。すぐ隣に船が一隻見えているほかは、月と星以外に光はない。もちろん陸地の明かりもない。大洋の真ん中のようだ。ぴちゃぴちゃと音を立てながら、波は光をはね返している。

「あれか?」伯母が言つた。

「はい」副長が答えた。

「でかい船だな」

船尾にはためいている旗から、ソビエトのものだということはすぐにわかつたが、伯母のいうとおり巨大な船だつた。四角い箱をいくつも積み重ねたような背の高い形で、大小の砲があちこちから二のツノのように突き出している。それに比べると、こちらの船はまるでおもちゃのようだ。今度は副長が鼻を鳴らすのが聞こえた。

「大げさなことですな、たかが小娘一人を引き取りに」

「よく知らんが、共産党の幹部に血縁のある娘だそうだ。ポートが

来るぞ」伯母が言った。

本当にそのとおりで、小型のボートがソビエト艦から降ろされたばかりで、こちらへ向かって走つてくるところだった。

「変ですか」双眼鏡をのぞきながら、副長が言った。「こぎ手の水兵が四人いるだけです。将校の姿が見えません。身柄を引き渡した証拠にサインをもらうようにきつく言われているのですが、どうしましょう? 外務省へ提出しなくてはならないとかで」

「本当か? ではサインは、私があちらに乗船して受け取つてこよう。あとあと面倒なことになると困る」

「中佐お一人で大丈夫でしょうか?」

「大丈夫さ。何か起きて、問題が国際化しては困るのはあちらだ」

数分後には、伯母は私を連れてボートに乗り移つていた。護衛をつけようと副長はもう一度言つたが、伯母はこばんだ。ボートは動き始め、ソビエト艦へと戻つていった。

伯母と私が相手の船に乗り込んでしまつて、ボートまでが甲板に引き上げられてしまふのを見て、副長はひどく驚いたことだらう。それだけではなく、艦尾のソビエト国旗までするすると引き降ろされ、あつという間にイギリス国旗に取り替えられてしまつたのだ。

双眼鏡を使うのも忘れて、副長は呆然とこちらを見ていた。だが独断で追跡を開始したり、攻撃をかけたりしないだけの分別はあつたようだ。イギリス艦は全速力で走り始め、日本艦はすぐに見えなくなつた。

イギリス艦の上では、私たちは客のような扱いを受けた。船名はパンプキンといい、航海訓練のためにたまたま香港に立ち寄つたのだが、伯母から緊急の連絡を受けて、イギリス政府が派遣してくれたのだった。船上で私たちは、武器のある区画にまで立ち入ることはできなかつたが、デッキの散歩ぐらいなら自由にさせてもらえた。私はときどき立ち止まり、大きな煙突がもくもくと煙を噴き上げるのを眺めた。

食事は専用の食堂で、士官たちと一緒にとるようになつた。伯母は制服姿だったが、私は着替えが少なかつたので水兵服を貸してもらい、大きすぎてだぶだぶしていたが、着て歩いていた。私と伯母が食堂へ入つていいくと、艦長以下全員が立ち上がって迎えてくれた。イスを引いて私たちを座らせるまで、誰も座らなかつた。末席にはなぜかロングもいたが、居心地が悪そうにしている。

食事は、ワインなども出るゆつくりとしたものだつた。低い声で話をしながら食べる。私は聞き役にまわることが多かつた。もう気づいていたのだが、伯母もかなり英語ができるようだつた。「あなたほどではないけれど、以前から外国の技術書を読んだりしたのですよ」と、あるとき伯母は言つた。

そんな食事の最中のことだつたが、ロングが言つた。

「佐藤というのも、ずいぶん気の毒な女だつたよな」

「ええ」伯母がうなずいた。「本当に」

「それは誰のことですか?」不思議そうな顔をして、艦長が言つた。

伯母が答えた。「以前はうちのメイドでした。ある事件があつて、冬子の身代わりにロンドンでしばり首になりました」

「あなたは、そのことを『氣の毒だとおっしゃっているのですか?』

「それだけではありません。佐藤は冬子の父親の姉がわりでもあります」

「どうこいつ」とです?」艦長は、さらに不思議そうな顔をした。まわりにいる士官たちも、同じような表情をしていた。

「カリバー一族のことば」存知でしょつか?」

「ああ」艦長を含め、数人がうなずいた。「不幸な一族でしたな。2年ばかり前に最後の一人が死んで、とつとう死に絶えたと聞きました」

「カリバーってなに?」私は口をはさんだ。ロングが説明してくれた。

「もともとイギリス北部に住んでいた一族でな。紫ダイヤと呼ばれるダイヤが家宝として伝わっていたのだが、とんでもなくでかいダイヤで、親指の先ぐらいの大きさがあったそうだ。傷一つない完全なものでな。値段はつけようもない。

それをめぐつて一族の間で血みどろの殺し合いになり、一人の男が命からがら国外へ持ち出した。造船技師の職を見つけ、身元を隠し、妻と息子も連れて日本へやってきた。息子の名はフィリップといつたが、その家庭教師として一人の女が雇われた。これが佐藤さ。

佐藤は屋敷に住み込んで、フイリップを弟同然にかわいがって育てた。

フイリップは成人し、父の後を継いで造船技師になつた。その造船所で軍艦を建造することになり、監督として、海軍から若い士官が派遣してきた。珍しくも女の仕官だった

皿を丸くして、私は伯母を振り返つた。伯母は何も言わず、下を向いていた。

「それでどうなったのかね？」艦長が言つた。ロングが続けた。

「外国へ逃げたからといって、カリバー一族も追跡をあきらめるようなことはしません。日本まで追いかけてきたのです。そしてダイヤを奪おうと屋敷に忍び込んだのですが、運悪くフイリップと鉢合はせになり、フイリップは殺されてしまいました。殺人者は跡も残さず国外へ逃げのびました。しかしここで、奇妙な誤解が生じたのです」

「なんだね？」

「青野の人々は、青野中佐とフイリップの仲にはもちろん気がついていました。そして気に入らなかつたのでしょう。すでに中佐の腹の中には冬子がいたのですが、フイリップと別れるように、中佐に強く迫りました」

「そんなこと、できるわけがありません」伯母は下を向いたまま、小さな声で言つた。泣いているのかもしれないと思つた。

「フイリップが殺されたのは、ちょうどこうしたときだったのです。

フィリップの両親はすでに故人でした。あとに残つたのは、家庭教師だった佐藤一人です。紫ダイヤのことは、佐藤も知らされてはいなかつたのでしょう。だとすれば、青野家の連中がフィリップを殺したのだと佐藤が誤解し、うらむよにならぬのも不自然なことではありません。正体を隠し、佐藤はメイドとして青野家にもぐりこんだのです

「セニで冬子さんが登場するのだね」

「生まれてすぐ、冬子は里子に出されました」

伯母が顔を上げた。「一年前に両親が死んで、邪魔者がいなくなつたので、孤児院から引き取り、女学校へ入れました。機会を見てすべてを話し、家を継がせるつもりでいたのです」

艦長がまゆを上げた。「青野中佐、これは単なる好奇心からする質問なのですが、ダイヤはその後どうなつたのですか？」

「フィリップから預かり、私が保管していました。こんなものさえなければ両親も異国で死なずにすんだものをと、手を触れるのも嫌がつている様子でした。私は銀行の貸し金庫に保管していたのですが、あるとき紛失していることに気がつきました。弟の仕業だと思えました。ダイヤの存在は、弟にしか話していなかつたからです。問い合わせてやろうと思つたのですが、弟はすでにロンドンへ向けて旅立つた後でした」

「その弟さんは、タービンの密輸に関わっていた人ですね」

「そうです」伯母はうなずいた。

食事がすんで、部屋へ帰るために廊下を歩いているときにも、私の胸にはまだあのペンダントがあった。佐藤の写真が入っているものだ。

私は佐藤を深く信用し、その言葉に耳を傾けたのだ。彼女が言うことはすべて信じたといつてもいい。佐藤は私に、父のかたきをうつようにそそのかしたのだ。しばり首になるときにも、佐藤はさぞかし満足だったことだろう。自分が死んでも、後を引き継いだ私がゼンマイ仕かけの自動人形のように計画をなしとげるのだ。すでにゼンマイはいっぱいに巻かれていた。佐藤は成功を確信していただろう。

この夜遅く、私はこいつそり部屋を抜け出し、甲板に出た。晴れた明るい夜で、月が高いところにある。雲も輝き、はっきりと姿を見せている。

船べりへ行き、手すりにもたれかかった。悩んだりためらったりするかと思っていたのだが、そんなことはなかつた。私はあっさりとペンダントをはずし、手すり越しに投げ捨てることができた。

小さな水しぶきを上げただけで、あとには何も残さず、佐藤の写真はインド洋の底深く沈んでいった。パンプキン号はイギリスへ向けて走り続けた。

天気がよかつたので、庭で日向ぼっこをしながら、私は本を読んでいた。メイドが茶を運んできてくれた。私が顔を上げると、彼女も気づいて、にっこりした。

「お母さんは?」と私は言った。

「種を買つたために市場へ行かれました。家庭菜園を広げるおつもりのようですよ」

「へえ」

門が開く音が聞こえてきたので、私はそちらへ顔を向けた。メイドも同じようにした。だがここからでは、植え込みが邪魔になつて門のあたりは見えない。

「誰でしょう? 奥様にしては早いようですが

「お姫さんかしらね?」

私は立ち上がり、様子を見にいった。客は門を入ってきて、ドアの前に立つてノックをしようとしていた。だが私に気づいて、持ち上げかけた手を途中で止めた。

「ロング」私は言った。

「おお」ロングは笑い顔を見せた。

「久しぶりね。元気だつた？」

「おまえも元気そつだな」なぜかロングが照れたような顔をしていふことに気がついた。ロングを居間に通し、茶と菓子を出した。

「元気そつな顔を見て、ちつとは安心したぜ」ロングは部屋の中を見回した。「中佐はどうだ？」

「出かけているの。もうすぐ帰ると想つわ。母に用なの？」

ロングはまじめな顔になつた。「兄貴から面倒な仕事を頼まれちまつた」

「なんなの？」

「それがさ、本人に直接話せといわれてる」

玄関の戸が開く音が聞こえてきた。

「母だわ」私は立ち上がり、居間を出でていった。すぐに母を連れて、ロングの前に戻ってきた。母の姿を見て、ロングがため息をついたのを私は聞き逃さなかつた。この日の母は、濃いブルーのドレスを着ていた。ロングは、制服姿でない母を見るのはこれが初めてだつたのだろう。

「母はこうじつし、腰をかがめて優雅にお辞儀をした。

「ロングさん、その節は本当にありがとうございました」

「いやいや」ロングは立ち上がつた。

母は私の前を通り過ぎて、長イスの上のいつもの場所に座った。
「私に御用ですって？」母はロングを見上げた。

「ああ「ロングは腰かけた。「あなたに見てもらいたいものがあつて、兄貴から預かつてきました」

「なんでしょう?」

ロングはポケットから一枚の紙を取り出し、母に手渡そうとした。
「不鮮明な写真ですまんがね」

受け取ろうと手を伸ばしかけたが、母は途中でやめた。「私が見てもよいものなのですか?」

「見てもらひてくれと兄貴が言つてゐる。正体がわからなくて、手こずつていいやうだ」

母は写真を受け取つて眺めた。私も隣からのぞき込んだ。

ロングが言つとおり、本当に不鮮明な写真だつた。ピントは合つておらず、粒子もあるいは、写つてているのは、夜の暗い海面のようだ。棒かパイプのようなものが、波立つ水面からぴょこんと垂直に突き出している。私には何のことやらわからなかつたが、母の表情が変わつたことに気がついた。

「ビームで撮影されたのですか?」母が言つた。

「それが何なのかわかるのかい?」

「わからぬくはあります。いつビームで撮影されたのですか?」

「一昨日、戦艦オレンジが沈没した話は知ってるかい？」

「新聞で読みました」

「新聞には事故だと書かれていたが、真っ赤なウソでね。調査の結果、魚雷攻撃を受けたものとわかった」

「魚雷？」

「あんなでかい船を一発でしとめたのだから、かなりいい魚雷だよな。日本海軍の雷神一号魚雷を思い起これると冗談は言つてた。どんな魚雷かオレは知らんが」

「戦艦オレンジが沈没したのはマーマレード港の沖でしょ？　日本の軍艦がいるはずはありませんよ」

「だが偶然、付近でこういう写真が撮影されていたんだ。民間人が撮影したものだが、海の真ん中で見つけて、なんだろうとシャツターケを切つたそうな。大ウミヘビの背中のトゲだろ？　うかと最初は思つたそつだがね」

「ところがそれが、鉄でできた大ウミヘビだったというわけですね」

「やうやくじこや」

「そうなのですか」母は長イスの背にもたれかかった。私がカッピュを手渡すと、茶を一口すすつた。

「これについて何か知つていてるかい？」ロングが言った。

「ええ、お話ししましょ」カップを置いて、母は身体を起こした。
「英國にてお世話をなっているから、」恩返しです」

「ありがたいが、申しわけない気がしないでもねえな。あんたを脅迫して、むりやり協力させたのだから」

母は微笑み返した。「もうすんだことです。それよりもこの話をしましょ」

「ああ」

「十年ばかり前から、日本海軍ではいろいろと不祥事が続いていたのです。ちょっとした嵐で船は沈む。大金を出して外国から買った潜水艇の性能は期待はずれ。あげく将校の昇進についての金銭スキンダルと続いては、政府内部で海軍の評価が下がってしまうのも当然でしょう。これで有事の際には本当に使い物になるのだろうか」という意見までさやかれはじめるほどだったのです。

そこへあの蒸気タービンの大失敗です。そのままいけば我々は冷遇され、陸軍にますます差をつけられてしまつてこう危機感が海軍全体に広がりました。この計画は、そういうときに持ち上がったのです。

はじめは酒の席での「冗談」だつたようです。外国の名のある戦艦を撃沈してみせれば、日本政府のお偉方だつて、海軍の実力を認めざるを得ません。平時ですから、おおっぴらに撃沈することはできませんが、誰がやつたのかばれなければよいのです。そして政府の石頭どもにだけ、あれは我々がしたことだと教えてやればよい。そういう計画だったのです。

私も耳にはしていましたが、「冗談だと思っていました。欧洲まで出かけていいて、英國海軍の戦艦を撃沈してみせるですって? 「冗談も休み休み言え、ところどころです。でも彼らは本気だったようですね。ひそかに船を建造し、実行に移したのでしょうか」

「具体的にはどうこの計画だったんだい?」

「Uの船は、タルのよつなずんぐりした形をしています。浮かぶでもなく沈むでもなく、クラゲのように水中をゆらゆらとただよつることができます。やつやつてイギリス近海に潜み、何でもいいから戦艦が通りかかったら、魚雷をぶつ放します」

「Uの写真がその船だとする根拠はあるのかい?」

母は写真を指さした。

「Uのパイプは、よく見れば三本の細いパイプをたばねたものだとわかるでしょ? これがエンジンの排気管。Uからが吸気管です」

「残りの一本は?」

「潜望鏡ですよ」

「あんたはよく知っているんだな、中佐」ロングはにやつとした。

母もこいつに笑った。「ぐんせき軍籍を離れていても、中佐と呼んでいただけるといれしくなつてしまふます」

「ああ、中佐殿」

「あまうれしがれないでください。私も図面を見せられたのです。冗談で描かれたものと思つていたのですが」

「他に何か記憶してこぬ」とあるか?」

「一つあります。船はマンボウでした」

「えらく奇妙な名をついたもんだな」

「形が似てゐるからじょう。もう一つ覚えてゐるのね……」

「なんだい?」

「図面には、魚雷発射管が一つ描かれていたところです」

ロングは口をぽかんと開け、長い間身動きもしなかつた。

「なんだって?」

母はこうした。「大型戦艦の沈没が、近くにマーマーレード港沖でもう一回起つたんだ」とです

「しかしまた、どうしてイギリス海軍が標的なんだ? どこの国だつてかまわないわけだらう?」

「それはやはり、蒸気タービンの件でつらみがあるからじょうね

「まあ」ロングはうれしそうに笑つた。「だがマンボウも、日本から単独でやつてきたのではあるまい?」

母につられたのか、ロングも唇をゆがめ、笑い顔を作った。

「しかしまた、どうしてイギリス海軍が標的なんだ? どこの国だ

「それはやはり、蒸気タービンの件でつらみがあるからじょうね

「 もう少し母船に積まれてきたはずです

「 母船？」

「 見かけはただの貨物船でしょう。船倉^{せんそう}に積んで日本からやつてきて、真夜中にクレーンを使って海に降ろしたのででしょう」

「 まさか、母船の名までは知らないよな

「ええ、そこまでは知りません」

「 まいったよなあ」 ロングは天井を向いて、あごの下をぽりぽりとかいた。

「 どうしたの？」 私は横から話しかけた。

ロングは私をじりりと見た。「マーマレード港は、ここから一十
マイルとありやしねえ。今すぐ調査に出かけない言いわけなんか、見つかりっこねえよなあ

母と私は顔を見合せた。

「 よし、仕方ねえ」 ひざをポンとたたいて、ロングは立ち上がった。
「 行くぞ、ファイツシゴ」

「 えつ？」

「 おまえも通訳としてついてくるんだよ。早くしな

一十分後には、私はロングと一緒に駅で列車を待っていた。その

一時間後には、マーマレード駅に立っていた。

「おなかがすいたわ」駅の建物を出ながら、私は言った。時計を見ると、もうすぐ正午だった。

「メシの話なんかするんじゃねえ。あとでなんか食わせてやるから」「私たちの大好きな通りにそつて歩き続けたが、まわりはだいぶ港らしい景色になつていた。レンガ色の大きな建物がいくつも並んでいて、倉庫街のようだ。背の高いクレーンの並んだ造船所も遠くに見えはじめる。船員向けの食堂や酒場がある。空氣に潮の匂いが混じり始める。

ロングが立ち止まつたのは、一階建ての建物の前だつた。いかにも役所という感じで、入口のわきには『マーマレード港税関』と書いてある。

「これはなに?」

「あん?」ロングは考へごとをしていたらしくて、ぽけっとした顔で私を振り返つた。「何か言つたか?」

「ここで向をするの?」

「ああ」ロングは軽くウインクして見せた。「まあ見てなよ

その一時間後には、私とロングはある埠頭を歩いていた。港のはずれで、ひとけのないあたりだ。岸壁が長くまつすぐに続いている。ずっと向こうに一隻の船が接岸しているのが見えていた。税関職員によると船名はウツボ丸。いまマーマレード港にいる唯一の日本船

で、もちろん貨物船だ。

私たちは税関職員の制服を着ていた。青いズボンと上着で、頭には帽子を乗せている。ロングが私を振り返った。

「どうでもいいが、おまえの制服は本当にぶかぶかだな」

私は自分の身体を眺めた。たしかにその通りだった。一番小さいサイズを貸してもらったのだが、それでも胴回りはゆるゆるだし、そもそも長すぎる。ズボンのすそは、折つてたくし込んでごまかしてある。肩のところがあまりにも余っているから、丸めたタオルを入れて調節していた。

「あなただって似合つてはいないわ」

私とは逆に、ロングの制服は小さすぎた。胸が分厚すぎて、上着の一一番上のボタンはとめることもできない。

「不審に思われないと祈るだけだな」

「むりじゃない?」

「知るか」

私たちは、ウツボ丸のそばまでやつてきた。立ち止まって船体を見上げた。

かなり大きな船だ。甲板の上には、背の高いクレーンが何台も突き出している。船腹には鉄製の階段が下ろされていて、地面に接している。そこに船員が一人いて、タバコを吸いながらこっちを見ていた。顔つきから見て日本人のようだ。

ロングは近寄り、その船員に向かつて、さつと敬礼をした。船員はびくつとして、思わずタバコを捨てて右手を上げかけた。だが途中でやめて、ほおをぼりぼりとかいた。

「船長はいるかね？」ロングが言った。

私はそれを日本語に通訳した。「船長さんはいらっしゃいますか？」

船員は田を丸くして私を見ていたが、すぐに日本語で答えた。

「いるよ。何か用かい？」

私がそれを英語に訳すと、ロングはにつこりして言った。「気にしないでくれ。この小娘は通訳だ。母親がほんくらな女で、日本から密航して来た女を乳母に雇っていた。その間、自分は遊びほうけてたんだな。そして気がついたら、イギリス人のくせに英語よりも日本語が達者というわけのわからぬえ娘になっちゃってた」

私がそれも通訳すると、船員はもつと驚いた顔をしたが、船長を呼ぶために階段を上がつていった。私たちは下で待っていた。船員の姿が見えなくなると、ロングがささやいた。

「あれは軍人だぞ。オレが敬礼するのを見て、とっさに敬礼を返そ

うとしやがった」

「日本海軍の軍人？」

「まず間違いねえな」

ウツボ丸の船長が姿を現した。鼻の下にちょびヒゲを生やした男

で、高級船員の制服を着て、つばのある帽子まできちんととかぶっていたが、服にはしわもなくぱりっとしていた。背筋を伸ばしたまま、階段をさつと下ってきた。

「何の御用でしじう？」私たちの前までやつて来て、船長はきれいな英語で言った。

ロングが私のわき腹を軽くつついて、にやりと笑った。「これで通訳の出番はなくなりましたな、え？」

船長は黙つて待つている。

「いえね」ロングが話し始めた。「正式の立ち入り検査ではないので断つていただいてもいいんですが、ちょっと船内を見せていただきたい事情ができまして」

「なんですか？」船長は無表情に見つめ返してくれる。

「いやあ」ロングは笑つて帽子を脱いで、頭を少しかいた。「アホみたいな話で恐縮なんですが、昨日の夜中のことなんですが、おたくの船の甲板に天女てんにょが舞い降りるのを見たという者がおりまして」

「なんですか？」

「天女です。背中に翼のある女神ですよ。おどき話で話してくれるでしょう？」

「それが本船に舞い降りたと？　ばかばかしいよた話ですね」

「オレもそう思うんですがね。田撃者たげいしゃってのが市長で、その直接の

命令とあつては、調べるふりぐらいはしないわけにはいきませんや。やつこさん、酒ビンが人生最良の友という男ではあるんですがね。カミさんとの仲もうまくいってないみたいで、欲求不満なのか、素っ裸の天女だつたと言い張つてまして」

「わかりました」船長はため息をついた。「」案内しましょう。隠すことは何もないですからな」

「すいませんねえ」

私たちは、船長のあとをついて階段を登りはじめた。あちこちさびた階段なので、私は少し恐かった。床はすけすけで、下が丸見えになつていて。今にも踏みはずして、転落してしまいそうな気がする。一步進むたびに地面が遠くなる。ロングの体重のせいで、ぎしぎしゅらぬら揺れる。

「早くしろよ」ロングが私を振り返つて、いらっしゃしたよつた声を出した。

「どうしたんですね？」船長も立ち止まつた。

「えへへへ」ロングは笑つた。「この通訳がグズで困りますあ」

「そうですか？」船長は表情を変えずに続けた。「蒸気タービン事件のときの手続きは、なかなか見事でしたがな」

私とロングは口をぽかんと開けたまま、顔を見合わせていた。

船長がおかしそうに笑つた。「これで、いもしない天女を探す必要はなくなつたわけですな」

「フィッシュ、走れ！」 ロングが勢いよく階段を駆け下りはじめた。

意味がわからず、私は一瞬遅れたが、すぐについて走りはじめた。ぐらぐらする階段を駆け下りていった。

転ばずに地面にたどりつけたときには、本当にほつとした。見上げると、船長がゆうゆうと階段を登りきって、甲板に姿を消すところだった。そのあと「どうする気なんだろ」と私がつぶやくのと、階段がぐらりと揺れて大きく傾き、一瞬は我慢したが、重力に引かれてすっと落下を始めるのとはほとんど同時だつた。

ロングが私の腕を乱暴に引いて、その場から離れさせようとした。階段は十メートル以上の高さから落ちてきて、私たちから何メートルも離れていないところで大きな音を立てて地面にぶつかり、石のカケラをいくつも弾き飛ばした。

「大丈夫か？」 ロングが言つた。

「うん」

「日本人め、乱暴なことをしやがつて」 ロングはいまいましそうな顔をして、ウツボ丸をにらみつけた。だが突然私を振り返つた。「おい、走るぞ」

「え？」

「ついてこい」

ロングに引きずられて、私は再び走り始めた。ウツボ丸を離れ、

倉庫と倉庫の間へ駆け込んだ。一ブロックほど走り続け、ある倉庫のかげまで行くと、海軍の制服を着た男が立っているのと出くわした。

「あの船で間違いねえ」はあはあ息を切らせながら、ロングが言った。

「絶対にねえか？」答えたのは、ロングの兄のウィルソンだった。

「間違いねえ。フィッシュの顔を知つてやがった

私は大きな声を出した。「そのために私を連れてきたの？」

「おまえなんぞ、そのぐらいしか使い道がねえよ

私のふくれつちらなど無視して、ロングは兄を振り返った。「例の人はまだ来ないのかい？」

「迎えの馬車をやつたから、もつすぐだひつ

馬車は十分もしないうちに現れた。からからと走ってきて、目の前に止まった。ドアが開いて、制服を着た母が降りてきた。ウィルソンは敬礼をして迎えた。背筋を伸ばして、母も敬礼を返した。

「私が話をしてきましょつ」事情を聞かされ、すぐに母は言つた。

「じつななんひつ」

母は振り返り、そばにあるクレーンを指さした。岸壁に作りつけたり、何トンもの重さのものを持ち上げることができる背の高い

ものだ。鉄骨を組んだ塔のような形で、てっぺんに操縦室がある。

母はクレーンのハシゴに手をかけた。「私となら口をきいてくれるかもしれません。どうなるかわかりませんが、まかせてくれますね？」

男たちは顔を見合させた。小さな声で「仕方ないんじゃねえか、兄貴」とロングが言うのが聞こえた。ウイルソンが肩をそびやかすのも見えた。

男たちは了解したと解釈したらしい。母はハシゴを登りはじめた。いかにも船乗りらしく、身軽に上つていった。聞こえはしなかつたが、口笛を吹きながらだつたかもしれない。どんどん高くなつていくが、スピードをゆるめもしなかつた。

母は操縦室まで行つた。そこからどうするのかと思つてみていると、窓を開けて身を乗り出し、ひょいとクレーンの腕に乗り移るではないか。私はひやりとしたが、母は平気な顔で、うまくバランスを取つて、腕にそつた狭い通路の上を歩き始めた。あつという間にクレーンの先端に行き着いてしまつた。

そこからは太いロープがまっすぐに垂れ下がつてゐる。母はそれにつかり、サルのように降りていつた。身体を揺らして反動をつけ、ウツボ丸の甲板に飛び降り、私たちからは見えなくなつた。

五分たつても何も起きなかつた。

「何をしてるんだろうな」

ロングが最初にしひれを切らせた。ウツボ丸が大きく汽笛を鳴らし始めたのはそのときだつた。

大きな船だから、耳をつんざくようだ。短い音と長い音を組み合
わせ、音はあるパターンになつてゐる。その同じパターンを、三回、
四回と繰り返す。

それがモールス信号であることに突然私は気がついた。イギリス
へ来てから、モールス信号を覚えるようにと母が何度もしつこく言
つた理由がわかつたような気がした。私は、急いで男たちをせきた
てた。

「早く馬車に乗るんです。早く」

母を乗せてきた馬車は、まだそこに止まっていた。私は二人の手
を引き、連れていこうとした。だが男たちはきょとんとしている。

「なぜだ？」ロングが言った。

「今のはモールス信号だな。何を言つたんだ？」ウィルソンが言つ
た。

日本語だつたからわからなかつたのだと、やつと私は気がついた。
男たちから手を放し、馬車に駆け上がりながら言つた。「われに続
き、貴艦きかんも自沈せられよ」

一人があわてて私のあとをついてきたことは言つまでもない。「
早く行け。船が爆発するぞ」とウィルソンから言られて、御者まで
が顔色を変え、ムチを振るつた。

とても大きな爆発だつた。馬車はすでに数百メートル離れたところ
にいたが、それでも車体が大きく揺れ、窓ガラスがびりびりい、
馬は驚いてさおだちになりかけた。

現場の被害は相当なものだった。ウツボ丸は船体を引き裂かれ、沈没していた。クレーンは倒れ、倉庫も一棟ばかり崩壊した。崩壊をまぬがれた倉庫も、窓ガラスはすべて失われた。埠頭は完全な作り直しが必要になった。

数分遅れて港外でも爆発があったが、こちらの被害はたいしたことはなかった。大きな音と共に海中から水しづきが上がり、何かがぶくぶくと沈んでいく気配があつて、それで終わりだった。

馬車に乗せられ、私はすぐに家に帰された。ウィルソンが気をつかつて、誰かを付きそわせようかと申し出てくれたが、私は断つて一人で乗った。母がもう帰つてはこないことをメイドにどう説明したものだろうと思いながら。

古着屋へ行つて、私は黒い上着とズボンを買つてきた。顔を隠せるような深い帽子も用意した。

家に帰つて、鏡の前で身につけてみたが、男に見えるかどうかあまり自信はなかつた。顔を少しずつ汚しておくことにした。

家をそつと抜け出した。メイドにも見られずにすんだ。町へ出て地下鉄に乗つた。

地下鉄に乗るのは久しぶりだつた。叔父と一緒に乗つたときのことを思い出せないではいられなかつた。

イスに座つたまま叔父が動かなくなつたあと、私は身体を探つて、強盗に見えることを期待して、持ち物を抜き取つたのだ。タービンの部品はそのとき見落としてしまつたのだろう。

サイフから現金だけを抜き取り、残りはすべて地下鉄の窓から投げ捨ててしまつた。叔父のポケットの中には、なにやらこまごまと物がいくつも入つていたのだが、その中に茶色い皮袋に入つた小さな丸いものがあつたことは覚えていた。急いでいたので、中身を確かめもせずにそれも捨ててしまつたのだ。

捨てた場所がどのあたりだつたのか、大体のことはわかつてゐた。あの日以来、私は地下鉄には乗つていないのでした。

ある駅で、私は地下鉄を降りた。叔父を殺した日に降りたのと同じ駅だ。

狭いプラットホームは人であふれている。天井は丸く、発車していつたばかりの列車の残した煙がまだよっている。人ごみをかき分けて、私は歩き始めた。

プラットホームのはしまでやつてきた。幸いここは出入口から遠く、人は少なかった。まわりを見回し、誰も見ていないことを確かめて、私はさつと線路に下りることができた。

すぐにトンネルの中へ向けて駆け出す。私の姿は、一瞬で暗闇の中へ消えてしまつたに違いない。

トンネルの中は暗く、駅よりももっと狭かった。本当に列車ぎりぎりの幅しかない。作業員が列車をよけるための小さな横穴が、ところどころ作つてある。歩きながら耳をすませ、私は一度横穴に入つて列車をやり過ごした。

そのたびに大きな車輪の音と振動に身体全体をゆすぶられ、濃い煙と蒸氣を吸い込まれた。目まで痛くなつてきた。それでも私は、目的の場所につくことができた。

さつきの駅からは一キロぐらいだつたと思う。そこに駅の廃墟があつたのだ。私は携帶用のランプを持っていて、列車が通るたびにフタを閉めて光が漏れないようにしていたのだが、ここへ来て高くかかげ、まわりを照らしてみた。

ここは廃止になつた駅だつた。ロンドンの地下鉄は新しい路線がどんどん建設され、線路も頻繁につけ変わっていた。だから中には、もう使われなくなつて廃止される駅も出てくるわけだつた。これもそういう廃駅の一つだつた。

叔父のポケットから取り出したものを窓から投げ捨てたとき、列車がちょうど廃駅を通過するところだったことを私は覚えていた。その後さつきの駅で下車したのだから、ここがその廃駅に違ひなかった。

古い時代の駅なので、大きなものではない。プラットホームもちやちで、短い列車しか停車できなかつただろう。私はため息をつき、どうこう投げ捨て方をしたのだったか、思い出そうとした。

突然列車の音が聞こえ、ヘッドライトが近づいてきたので、私は柱の影に隠れた。『じうじう』と音を立てながら、列車が通過していく。客車の車内は明るく照明されている。列車が行つてしまつてから、私は足元を探し始めた。

私が家に帰つてきたのは、夕方近くだつた。体中が真っ黒に汚れているのを見て、メイドはひどく驚いていた。すぐに風呂に入り、身体を洗つた。

ひどく疲れてはいたが、嫌な気分ではなかつた。無駄な一日ではなかつたからだ。化粧台の上には、廃駅で見つけたものが置かれていた。

「そりやあねえよ」次の日、家に呼びつけて用件を聞かせると、珍しくもロングは弱氣な声を出した。

「どうして？」

「親父だけは勘弁してくれ。オレは頭が上がらねえんだ。もし怒らせでもして、相続人名簿から外されたらどうしてくれる？」

「何言つてゐるのよ。カリバー一族はもつすべて死に絶えたと知つていたくせに、『フィリップの娘がまだ日本で生きている』ことを密告してやる」と言つて母を脅迫したのはあんたよ」

「あのときは仕方がなかつたんだ。オレを相続人から外すと親父がおどすもんだから…」

「言つことをきかないと、本当に相続できないうにしてやるからね。まあ、早く私をお父さんのところへ連れていくなさい」

ロングはしぶしぶ承知した。飼い主にけとばされた犬のような顔をしているのがおかしかった。その日の昼過ぎには、私たちは海軍省の庁舎にて、応接室のようなところへ通され、海軍大臣が姿を見せるのを待っていた。

ロングは私の隣に座つて、背中を丸めて小さくなつてゐる。ドアが開いて、とうとう大臣が入つてくると、ロングはぴくりと飛び上がつた。

大臣は、想像していた人物とはまるで違つていた。ウイルソンの父でもあるわけだが、特に似ているとも思えず、むしろロングが父親似なのだろう。ロングを小柄にし、顔にしわを増やし、頭をはげさせたような感じだ。口ひげは同じように濃い。

海軍大臣ヘンリー・ロングは私を見て、「やあやあやあ」と甲高い声でいさつをした。大臣という言葉が持つ堅苦しいところはまったくなく、どこかの農園の気楽な経営者とでもいう感じだ。それでも制服は着ているが、私とロングに向かい合つて、気楽にちょんと腰かけた。

「若いお嬢さんをお迎えする」となぞめったにないので、ビザビを
するよ。それと、そこでしかめつ面をしているのは、わが息子のよ
うだな」

ロングはちらりと顔を上げ、片手を振った。

ヘンリーはうれしそうに笑った。「相変わらず愛想のいいやつだ
わい。それで冬子さん、何の御用でしよう。私でどうお役に立てま
しょう?」

私はポケットに手を入れ、ハンカチに包んだ小さな物を取り出し
た。テーブルの上に置き、ゆっくりと広げてみせた。窓から差し込
む光を反射して、石はきらりと輝いた。

「これは?」ヘンリーはひどく驚いた様子だった。ロングも口をぽ
かんと開けている。

「カリバー一族の紫ダイヤです」私は答えた。「ある場所で見つけ
ました。叔父は、換金するつもりでこの国へ持ち込んだのでしょうか
」

「なるほど」ヘンリーはため息をついた。ロングは言葉もなごよう
だつた。

「それで、何のためにそれを私にお見せになるのです?」再びヘン
リーが言った。

私はこいつりと微笑みかけた。

「これを国王陛下に献上したいのです」

「しかしそれは、値をつけたことができぬほどのですよ」

「国家の所有物として博物館かどうかにおさめてもうりえれば、一度とあなた方をわざりわせることはないでしょ？」「う

ヘンリーは不思議そつに私を見つめた。「失礼な言い方かもしないが、あなたはとてもすつきりした顔をしておられるように見えるが」

「ええ。文字通り暗闇を抜け出し、光の中へ戻ってきたような気分です。本当に長い暗闇でした。ホーリとススだらけの場所で、ときどき「ウゴウ」という音が聞こえる他は何もわかりませんでした。今から考えれば、あれは地下鉄の音だったのですね」

「地下鉄？」

「その前には冬子の叔父のポケットの中にいました。その前は鉄でできた金庫の中。何世紀にもわたって、血にまみれた手から手へ奪い取られたことが何度あったことか」

「何の話をなさつてこるのです？」

「私自身の話ですよ。それはそつとロング大尉」

ヘンリーと顔を見合させていたが、ロングはぴくんとして振り向いた。「なんだ？」

「」の娘は、いつかあなたのことを好きになるような気がします。結婚してやれば、よい妻となるでしょう」

「なんだつて？」

冬子は微笑んだ。「私はもう、人の手から手へ、暗闇から暗闇へと渡つていく」とに疲れてしましました。どこかにひつそりと落ち着きたいのです」

「だからイギリス国王陛下に献上されたいと?」ヘンリーは言った。

「そうです。何世紀にも渡り、私には様々な不幸が付きまとつてきました。私をめぐつて、何人が命を落としたか知れません。でも國家の所有物となれば、その悪運も終わりを告げましょう」

「あなたは、なぜ青野一族に復讐しようとしたのです?」

「何世紀にもわたつて、カリバー一族は私の正当な所有者でした。私にも奇妙な忠誠心のようなものがなかつたわけではないのです」

「ふん」ロングはいかにも気に入らない声を出した。「おまえなんぞを所有して、この国が滅びたりしなきやいいがな」

「それは、あなたのように立派な方がいれば大丈夫なのではありますか?」

「こいつめ、石ころのくせに人間様に向かつて皮肉を言いやがる」

「私のような目にあえば、それぐらい言いたくなりましょ。では大臣閣下、献上の件はご承知いただけたと思つてよろしいですね?」

ヘンリーはため息をついた。「ええ、陛下にお話してみましょ。細かいきさつは伏せてですが、きっと承知してくださるでし

よ「う

ロングの表情が変わった。「それはそつとフイッシュ。おまえ、タービン事件の報酬をまだオレに払ってないぞ。今すぐ耳をそろえて…」

だがロングの言葉は、途中で途切れてしまった。ヘンリーが片手を上げて制していた。

「ジョン、見るんだ」

「何ですか？」

冬子は口を閉じてしまっていた。長イスの背に寄りかかってうた寝をしながら、楽しい夢でも見ているような表情だ。そしてその微笑が途切れ、一瞬まゆにしわを寄せ、はつと口を覚ました。驚いたような顔で一人の男を見つめ、部屋の中を見回した。自分がいる場所にはじめて気がついたとこつ表情だ。

冬子が口を開き、何かを言つたが、ヘンリーにもロングにも理解できない言葉だった。男たちは顔を見合させた。また冬子が何かを口にした。やはり理解できない外国語だ。それでも冬子は微笑み、機嫌よさやうに一人を交互に眺めている。

「父ちゃん、これはどうことじとだい？」ロングが言つた。

ヘンリーは、ほつと納得したような顔をしていた。息子のほうを向き、口を開いた。

「ジョン、日本語の通訳を呼んでくるんだ。当分必要だらう

ロングは立ち上がつた。ドアが開く音を聞きながら、ヘンリーは

宝石に手を伸ばし、そっとハンカチに包んでポケットの中に入れた。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1387d/>

冬子と密輸団

2011年11月11日15時55分発行